

&lt;論文&gt;

## 宗教と暴力、そしてディーセンシィー

新 免 貢

### はじめに——宗教の二面性に注目——

個人レベルの暴力から政治的・歴史的・文化的要因が絡んだ暴力に至るまで、現実世界では種々様々な形の暴力が見られる<sup>1</sup>。人々の生活を圧迫する社会経済システムも、住民の利害と衝突する法権力の強制執行も、国家の論理にとっては正当であっても、抑圧される側にとっては暴力の一つの形と認識される。さらに、世界を席卷するアメリカ型グローバリズムも暴力システムの一例と見なすことも不当ではないであろう。というのは、グローバリズムは、国民国家の枠を超えて、われわれ一人一人の人生の選択や生き方にまで影響を与え、各地の文化的特性と暮らしの多様性を破壊しているように見受けられるからである。こういう状況が今日多発するテロの背景にあることは否めないように思われる。

ユダヤ教、キリスト教、イスラーム、仏教など、世界の諸状況に絡んでいる諸宗教は暴力性を免れていないと言うべきであろう。さらに、ここで「宗教」という言い方をする場合、その他の既成の諸宗教団体のみならず、世間には奇異に感じられるカルト諸宗教団体もそこに含まれる。いろいろな角度から教義や実践などの面において、諸宗教の暴力的要素を引き出すことは可能である。殺生を否定する仏教もその例外ではない。宗教学者マーク・ユルゲンスマイヤーが様々な具体的事例を挙げて指摘しているように<sup>2</sup>、宗教の種々の聖典は、世界の変革への希望だけではなく、暴力のイメージをも含んでいる。実際、暴力を正当化するために宗教観念が引き合いに出される例は珍しくない。このようなマーク・ユルゲンスマイヤーの方法論的出発点に立つ本稿の意図は、キリスト教を具体例として取り上げ、世界変革ビジョンと破壊的な暴力イメージを抱くキリスト教の二面性を明らかにし、暴力抑止に至る考え方の構築の可能性を追求することである。末尾に付した資料1（エルデル・カマラ著『暴力の螺旋』）と資料2（ポール・J・ヒル「守るすべのない者たちを守る」）は、本稿で展開されている議論の内容と直結し

<sup>1</sup> Craig L. Nesson, "Sex, Aggression, and Pain: Sociobiological Implications for Theological Anthropology," in *Zygon* 33 (1998), pp. 443-454; David Riches, "The Phenomenon of Violence," in *The Anthropology of Violence*, ed. by David Riches, Oxford: Blackwell, 1986, pp. 1-7.

<sup>2</sup> 『グローバル時代の宗教とテロリズム——いま、なぜ神の名で人の命が奪われるのか——』（立山良司監修、古賀林幸・櫻井元雄共訳、明石書店、2003年；Mark Juergensmeyer, *Terror in the Mind of God: The Global Rise of Religious Violence*, University of California, 2003）。

ているが、いずれも私訳であり、直接引用する場合、原資料に当たっていただきたい。

なお、本稿は、「カマラ大司教の暴力論に関する再評価の試み」と題する日本宗教学会第74回学術大会研究発表（2015年9月6日、創価大学）、「聖書と暴力——中絶医射殺事件を手がかりとして——」と題する日本基督教学会第63回学術大会研究発表（2015年9月12日、桜美林大学）、及び、イスラエルによるガザ侵攻を批判したがゆえにイリノイ大学の終身雇用契約を取り消されたスティーブン・サライタ氏の話の告発本（Steven Salaita, *Uncivil Rites: Palestine and the Limits of Academic Freedom*, Chicago, Illinois: Haymarket Books, 2015）に関する吟味を骨子として執筆されたものである。執筆のための資料収集に伴う経費は、宮城学院研究助成Dによる。記してここに感謝する。

## 1. 聖書と暴力——中絶医射殺事件を手がかりとして——

最初に、宗教的観念が絡んだ暴力の一事例として中絶医射殺犯ポール・ジェニングズ・ヒル牧師<sup>3</sup>の弁明「守るすべのない者たちを守る」<sup>4</sup>を取り上げる。同弁明においては、中絶阻止の実力行使を神から与えられた不可避の義務として正当化するために、聖書の物語や言葉が援用され、中絶医射殺の動機や葛藤が吐露されている。聖書と暴力という主題に取り組んできた専門家諸氏の所説を用いて、ヒルの暴力肯定の論理を却下することは容易である。しかし、それによってヒルの暴力行為が抑止されるわけではない。むしろ、専門家たちの規範的分析だけではなく、一般の非専門家たちをも巻き込んだ議論の共有が重要であろう。大学において宗教関連科目を担当する筆者は、ヒルの上記声明文の私訳に最小限度の注釈を付して、「暴力を食い止めるために——ポール・J・ヒルの一文に寄せて」と題するレポート作成の課題を与えた<sup>5</sup>。

---

<sup>3</sup> Paul Jennings Hill (1954-2003年)。1994年7月29日、フロリダ州ペンサコラの中絶クリニックの敷地内で、待ち伏せしていたヒルは医師ジョン・ブリトン、ボランティアの警護員ジェイムズ・バレットの二人を散弾銃で射殺した。彼は同年12月6日、死刑判決を受け、2003年9月3日、中絶反対活動家としては初めて致死注射で処刑された。事件は米国のマスコミでも比較的広範囲に取り上げられたと言って差し支えない。事件の概要と彼の生い立ち、人となり、後先を考えない突飛な行動、LSD使用体験、学業成績不振、家族などに関する詳細な情報は、事件から10日後の8月7日付『ワシントン・ポスト』記事（"Turning From 'Weapon of the Spirit' to the Shotgun," by Kathy Sawyer）に紹介されている。その他に、9月3日付『ペンサコラ・ニュースジャーナル』記事（"Hill Supporters, Death Penalty Opponents Converge on Prison; Media outnumbers all demonstrators," by Troy Moon）、9月4日付『マイアミ・ヘラルド』記事（"Hill Defiant to the End, Urges on Activists," by Phil Long and Lesley Clark）、並びに、同日付『ニューヨーク・タイムズ』記事（"Florida Executes Killer Of an Abortion Provider," by Abby Goodnough）なども参照。

<sup>4</sup> "Defending The Defenseless," by Paul J. Hill, August, 2003. 末尾に掲載したヒルの声明文の私訳（資料2）は、[http://www.armyofgod.com/PHill\\_ShortShot.html](http://www.armyofgod.com/PHill_ShortShot.html) に依拠。

<sup>5</sup> レポートを課した授業「総合コースE：宗教と社会」は、4人の異なる担当者が計7回にわたって各自の専門領域を小テーマとして担当し、オムニバス式で開講された。宗教が社会に及ぼしている影響の具体例を学ぶことを趣旨とする本授業の受講者数は、2015年度は89名であった。評価方法は、各テーマの小テスト、及び、期末試験の成績に基づく。

非専門家の彼女たちの暴力批判は、専門家たちの見解と比較し、産む性としての女性の側から発せられた鋭い問いかけと同情論を含んでいた。こういう議論の中に当事者となりうる非専門家たちを取り込んでいくことは、より広い文脈で暴力抑止の言説の市民的構築につながる方法として期待される。

### 1) 「守るすべのない者たちを守る」の内容

中絶反対行動を弁護するヒルの一連の文章は、本稿で取り上げる「守るすべのない者たちを守る」も含めて、中絶阻止のための暴力行使を容認する反中絶派組織「神の軍」が運営するホームページ上で公開されている<sup>6</sup>。

ヒルは、学業成績不振ながら妻の支援もあって神学校を卒業し、アメリカ長老派教会<sup>7</sup>と正統長老派教会<sup>8</sup>において七年間、彼にとっては実りのない牧師職を務めた。結局、両教派の陪餐資格理解に違和感を覚え、彼は両教派から離れた。

「守るすべのない者たちを守る」は、「命のために戦う」「目覚ましい成果」「好機の窓」「神の約束を思い起こす」「苦渋の決断」「殺す準備を進める」「中絶医を待ち伏せする」「逮捕されたが、うまくやり遂げる」「言いなりになるという束縛を打破する」「家族軽視と過剰暴力?」「法的救済に限定されるか?」「立証責任」「命を脅かされている子供を救うことの優先権」「裁判を一笑に付せ」「真実を変質させる世界」の各項目に分けて、聖書物語や具体的な箇所を援用しながら、あるいは示唆しながら、犯行の動機の正当化を試みている。たとえば、ペルシア王アハシュエロスの弾圧に屈しなかったユダヤ人たちの防衛行動を描いた『エステル記』を引き合いに出し、それを中絶反対行動という自らの防衛行動と重ね合わせる。自分自身と神との関係をアブラハムと神との契約関係（同15章1-6節）と結びつける。中絶阻止をアブラハム物語における甥ロト救出（『創世記』14章）にたとえる。

家族のことが頭から離れず、計画実行に逡巡するヒルの思いに対して与えられたのは、神はすべてを善きことへと導くという確信であった（『ローマの信徒への手紙』8章28節）。「何であれ、信仰によらないものは罪である」と記されている以上、行動しないことは不服従という途轍もない罪となる（同14章23節）。家族への配慮以上に優先されるのはイエスの教えであり

<sup>6</sup> *The Authorized Paul Hill website* hosted by the Army of God.  
(<http://www.armyofgod.com/Paulhillindex.html>)

<sup>7</sup> Presbyterian Church in America. リベラルな流れに抗う保守的な長老派教会、1973年設立、2002年現在、信徒数は310,750人。女性牧師の否定、逐語霊感説、聖書無謬説などを唱える。本部はジョージア州アトランタ（Frank S. Mead, Samuel S. Hill, Craig D. Atwood, *Handbook of Denominations in the United States: 12th Edition*, Nashville: Abingdon Press, 2005, pp. 140f.）。

<sup>8</sup> Orthodox Presbyterian Church. アメリカ長老派教会の近代主義路線容認に対する反対派が、1936年、プリンストン神学校教授J. グレシャム・メイチェン（1881-1937年）主導の下に創設。2002年現在、信徒数は26,448人。聖書無謬説に立ち、原罪、処女降誕、キリストの神性と代償的苦難、復活、昇天、終末におけるキリストの審判、王国の完成などを唱える。本部はペンシルヴァニア州（*ibid.*）。

（『ルカによる福音書』14章26-27節）、人間よりも神に従うべきである（『使徒言行録』5章29節）。

イエスによる宮清めの実行使（『マルコによる福音書』11章15-18節、並行箇所）のように、キリスト教徒たちは中絶クリニックの机をひっくり返し、クリニックに出入りする人々を敷地内から一人残らず追い出すことをしないのか。殺人に相当する中絶を容認する政府は、『出エジプト記』20章6節の殺人禁止規定を守っていない。第二の戒め（『マルコによる福音書』12章31節他）、黄金律（『マタイによる福音書』7章12節）、サマリア人のたとえ（『ルカによる福音書』10章30-37節）は、子供たちに差し迫った脅威をすべての関心事よりも優先すべきであることを示している。

要するに、ヒルにとって、中絶医射殺はまさにサタンの攻撃——中絶医のメス——に対する抵抗であり、福音の原理を支持することになる。「守るすべのない者たち」、すなわち、まだ生まれていない者たちを中絶という名の殺人から救済し、そのために行使される暴力を支持するのが当然であるとヒルは強く主張した。警察の車に連行された時、ヒルは一握りの人々の前で、「一つのことがはっきりしている。それは、今日、あのクリニックで罪のない人間が殺されることはないということだ」と叫んだ。また、署の玄関から外に出る際、「殺されようとする奴隷たちを守ったのと同じように、今こそ、まだ生まれていない者たちを守る時である！」と宣言した。さらに、ヒルは、刑を言い渡される段階で初めて裁判官に話しかけ、以下の「締めくくりの主張」を読み上げた。

あなたには隣人の命を守り、そうする必要があるならば暴力を行使する責任があります。あなたはこの真実を隠そうとして、私の血を、まだ生まれていない者たちや、抑圧された人々を守るために闘った者たちの血と混ぜ合わせるのかもしれない。しかし、真実と正義が勝つのである。神があなたを助けて、あなたが守られたいと願うように、まだ生まれていない者たちをあなたに守らせてくださるよう。

われわれが憂慮しなければならないのは、彼がユダヤ教聖典、キリスト教聖書を引き合いに出し、それを暴力行為の根拠にしていることである。この種の行動を抑制するための言説の構築はいかにして可能か。

## 2) ヒルに対して、いかなる反論が可能か

ヒルの弁明や、友人M. ブレイの中絶反対派の暴力支持論<sup>9</sup>を却下し、疑義をはさむこと自体は容易であろう。

---

<sup>9</sup> Michael Bray, *A Time to Kill: A Study Concerning The Use Of Force and Abortion*, Portland, Oregon: Advocates for Life Publications, 1994.

たとえば、神を「勇士」とする表象（『出エジプト記』15章3節）や敵の「全滅」（ヘレム）に関する描写（『サムエル記・上』15章3節）などにも見られるように、聖書には暴力的イメージがつきまとう。「あらゆる書物の中で、聖書が最も危険な書物、殺す権限を賦与されてきた書物である」<sup>10</sup>と評されるのも理解できよう。旧約聖書学者J. J. コリンズが述べているように、聖書に確かさを求めることが暴力に結びつき、暴力を軽減するためにはその確かさが幻想であることを聖書批評学者は明らかにしなければならない<sup>11</sup>。しかし、この見解は、原理主義的な精神の閉塞性を指摘した『原理主義——確かさへの逃避』（ヴェルナー・フート著、志村恵訳、新教出版社、2002年）<sup>12</sup>の主張と同様、穏健派には受け入れられやすくとも、国家による中絶合法化に決して屈しないとするヒルのような強硬派には通用しない。

ヒルは、特定の聖書箇所によって自らの世界観を形成し、それに基づいて中絶に反対し、過激な行動をとった。「社会の、それどころか人間存在のあらゆる局面に宗教が浸透していなくてはならない」とする確信がヒルのような過激主義者の特徴である<sup>13</sup>。テロ行為をも辞さないヒルは福音派的キリスト教の特殊なタイプに属していると言えるかもしれないが、彼もまた聖書の言葉を行動規範とし、それを社会に適用させた。その結果が暴力行為であったという点を除けば、聖書そのものの読み方に関して言えば、近代主義を批判するタイプの福音派と多様な価値観を受け入れるタイプのリベラルとの区別は実際容易ではない<sup>14</sup>。それゆえ、聖書解釈という観点でのみヒルの暴力行動を批判することは慎重を要する。

宗教学者D. クラントンが提唱するように、キリスト教界内外において教養的聖書知識を共有することにより、暴力抑止の空気と意思形成が公的に広がり、それが社会に好結果を及ぼすことも考えられる<sup>15</sup>。確かに教養的聖書知識の共有は市民的課題として重要なことである。しかし実際、聖書学の知見に基づくキリスト教の定義の再検討や聖書の読み方の多様化という最近の潮流の中で、教派的伝統や各教会の信仰的立場も異なり、信仰共同体内では自己の信仰理解

<sup>10</sup> Mieke Bal, *On Story-Telling: Essays in Narratology*, Polebridge Press, 1991, p. 14.

<sup>11</sup> J. J. Collins, "The Zeal of Phinehas: The Bible and the Legitimation of Violence," in *JBL* 122/1(2003), pp. 3-21.

<sup>12</sup> Werner Huth, *Flucht in die Gewißheit: Fundamentalismus und Moderne*, 1995.

<sup>13</sup> Bruce Lincoln, *Holy Terrors: Thinking About Religion After September 11*, Chicago: University of Chicago Press, 2003, p. 5.

<sup>14</sup> これについては、拙論「聖書対近代主義——過去と現在——」（『宮城学院女子大学研究論文集106号』45-76頁、2008年6月）、及び、同「キリスト教原理主義」『宗教のキーワード集——この1冊で世界がわかる』（三木紀人・山形孝夫編、別冊国文学No.57、学燈社、2014年、153-155頁）を参照。また、アメリカ合衆国の「福音派」の歴史や現況を包括的に紹介した本が最近、福音派側の政治学者マーク・R・アムスタッツによって著された（加藤万里子訳『エヴァンジェリカルズ——アメリカ外交を動かすキリスト教福音主義』、太田出版、2014年）。しかし、本書が福音派の功績を中心に記述し、ヒルのような中絶反対の強硬派に関する言及が一切ないのは奇妙である。

<sup>15</sup> Dan Clanton, "Biblical Interpretation and Christian Domestic Terrorism: The Exegeses of Rev. Michael Bray and Rev. Paul Hill," in *SBL Forum*, Aug 2008.

を揺るがされない範囲内で聖書を読むことが一般的と思われる。聖書の教養的知識は、一般市民であれ教会関係者であれ、各個人の努力に負うところが大きいであろう。

社会学者C. セレングートによれば、宗教的価値観を教育論議の中に取り込み、市民の倫理的判断に役立て、宗教を周縁化しなければ、宗教は社会的承認を求めて戦う理由が弱まり、宗教的憤りの爆発を未然に防ぐことが期待される<sup>16</sup>。しかし、この場合、社会正義や平和といった人類共通の課題の取り組みは別として、一般受けしない幻想的な宗教言説の許容は社会との深刻な断絶を生じさせる恐れもあろう。また、多様性と多極性は民主主義の統治体制における肝心かなめの部分である以上、宗教を個人的な領域内のこととして公共空間から排除するわけにもいかない。フランスにおける世俗主義・政教分離の原則、いわゆるライシテが宗教の代替物に簡単になりえないことは、最近のテロ事件が逆によく示している。現代フランスを代表する哲学者マルセル・ゴーシェは、宗教が衰退するにつれてライシテの原理も弱まり、「原理なき事実と化していく」と鋭く指摘している<sup>17</sup>。神の権威を国家のそれよりも上位に置くことは認めるわけにはいかないが、宗教が倫理的英知の源泉として、社会を構成する市民と政治機構との間をつなぐ機能を果たしうると法律学者S. L. カーターは指摘する<sup>18</sup>。社会的不公平の是正を訴える宗教側の取り組みが国家の政策よりも効果的である場合もあり、国家の枠組みを超えた価値を追求する宗教の力は侮れない。宗教の自由のゆえに宗教が国家に介入することを認めるわけにはいかないが、ヒルの中絶医師射殺は、国家の枠組みに左右されない強固な宗教的信念に支えられているのである。

一方、キリストの再臨に備えるために、世俗の物質主義を脱した神政政治を標榜する再建神学（reconstruction theology）の指導者G・ノースは、ヒルからの手紙に対して、ヒルは決して承服しないであろうことを想定した上で、ヒルの射殺行為を一匹狼的な非公式の違法行為として批判し、法的根拠はないと答えている<sup>19</sup>。両者の基本的な神学的姿勢は類似しているだけにG・ノースの応答は注目されるが、彼からの返事は生前のヒルには届かなかった。

しかしながら、「今日、あのクリニックで罪のない人間が殺されることはない」と連行時に叫んだヒルは、中絶という大量殺人の放置を不作為の罪として告発しており、これらの専門家たちの意見に承服するとは考えにくい。そこで、ヒルに対する反論が功を奏さないまま終わることのないように議論への参加者たちの範囲を広げる試みとして、産む性としての女性の側、

<sup>16</sup> Charles Selengut, *Sacred Fury: Understanding Religious Violence*, Walnut Creek, Calif.: Alta Mira, 2003.

<sup>17</sup> マルセル・ゴーシェ著、伊達聖伸・藤田尚志共訳『民主主義と宗教』、トランスビュー社、2010年、57-60頁。

<sup>18</sup> Stephen L. Carter, *The Culture of Disbelief: How American Law and Politics Trivialize Religious Devotion*, NY: Basic Books, 1993, pp. 21, 36-37.

<sup>19</sup> Gary North, *LONE GUNNERS FOR JESUS: Letters to Paul J. Hill*, Institute for Christian Economics, Tyler, 1994. この文献は、下記のウェブ上で閲覧可能である。  
(<http://freebooks.entrewave.com/freebooks/docs/html/gnlg/gnlg.html>)

将来母親になるかもしれない女子学生たちに問うてみるのが一つの突破口になるのではないかとこの考えに至った。ヒルの暴力行為や動機が非専門家の彼女たちにどのように見えているのか。

### 3) 女子学生たちの反応

レポートを提出した学生たちの大部分は、「中絶医を殺すことが神からの使命であると信じて疑わないような人に『暴力はいけないからやめなさい』と言っても無意味」とする意見に代表されるように、ヒルの聖書解釈と行動に明らかに否定的であった。

しかし、「彼だけがすべて悪いとは言えない。医者、中絶を望む母親、政府にも原因がある」などの同情論も一部あったことは看過できない。

「ヒルは殺人鬼や復讐者ではない。家族を大切に思っている普通の父親で、われわれと何ら変わらない。子供のために中絶医を殺したヒルと、世のため、人のためヒルを殺した法権力との違いは何であろうか。私は、違いはないのではと考える」という意見は、いかなる形の殺人も法の処理範囲を本質的に超えていることを深く洞察している。ヒルを批判する側の論理にも暴力の契機が存在するのである。

彼の聖書解釈に関して、「自分の考え方と聖書の教えを、まるで答え合わせでもしているかのように照らし合わせている」という指摘が最も正鵠を得ている。この指摘は、今日における多くのキリスト者たちの聖書の読み方にもある程度適合するであろう。

彼の行動の効果に関しては、「中絶医を殺してもクリニックに行く母の数は減らない」「中絶反対は正義だと思う。ただ、正義があっても暴力がそこから誕生してしまった時点で不正義になってしまう」という批判は、正義と不正義の分かれ目を暴力の有無にあるとし、正義の暴力と不正義の暴力とを区別していない点で思想的な崇高さを感じさせる。

「あなたの考えは間違いじゃない。でもそれと同時に、あなたが憎んでいる人たちもまた間違えていないし、意見が合わないのが当たり前で、必要なのは相手を説き伏せることではなく、相手を受け入れること」「宗教の考え方を否定せず事実として学ぼうとする相互理解が大事」などといった対話による異なる論理の突合せを求める声もあった。

さらに、男性であるヒル本人に対する厳しい問いかけも注目される。「あなたの奥さんが強姦され、妊娠してしまいました。傷ついた奥さんにそれでも産めと言いきることが出来ますか」「むやみに子供を産ませて、男のあなたに母親の気持ちが分かるのか、責任がとれるのかと言いたい」などの声は、産む性としての当事者の立場をよく反映している。この立場は、「産むか産まないかは女が決める」<sup>20</sup>というかつての女性解放運動側からのスローガンだけではなく、

<sup>20</sup> 大橋由香子「産む産まないは<sup>わたし</sup>がきめる——優生保護法改悪阻止運動から見えてきたもの」『女は世界をかえる』（講座女性学3、女性学研究会編、勁草書房、1986年、48-73頁）。

中絶の権利はプライバシーに関わる人権であり、その侵害が暴力に相当するというアメリカの中絶論争<sup>21</sup>の議論ともつながってくる。

「暴力は人々に関心を持たせないため起こる。彼自身に訴えるだけではなく、私たちの無関心も暴力を生んでいる」という指摘は、日常の凡庸さが暴力を支えていることへと注意を促し、われわれの側に責なしとは言えないことを改めて考えさせてくれる。

上記の異なる分野の専門家たちが専門的な考えに基づいて開陳する専門的知見と比較して、これらの女子学生たちの見解は、現代社会に存在するいろいろな種類の暴力に対する向き合い方にもヒントを与えており、暴力をめぐる世論を形成する上で有効であると筆者は考える。

#### 4) 非暴力の空気を形成するために

聖書に基づくと主張するヒルの暴力が不正義で、それに対して法的に対抗しようとする側が正義などと単純に言えるであろうか。一方が不正義で他方が正義という二項対立的な図式は、暴力を再生産し続ける恐れもある。この二項対立の図式は、イスラーム側の過激な動きに戦慄を覚えるリベラルを標榜する欧米側の「自爆テロ」という言い方とも考え方の枠組みとしては類似しているように思われる<sup>22</sup>。政治や経済の仕組みに起因する構造的な暴力の螺旋状態<sup>23</sup>に陥っている世界の現状から見ると、「自爆テロ」という言い方は、暴力を抑制する上で必ずしも効果的とは言えない。むしろ、「自爆テロ」であれ中絶阻止の実力行使であれ、暴力を抑止するために必要なのは徹底した対話と説得であろう。いかなる形の暴力をも是としない空気をキリスト教界の内外で時間をかけながら形成していく姿勢が今後肝要である。その場合、物事を論じるだけで自らの社会的立場を保持できる専門家たちの知見だけではなく、ヒルの一文に対する女子学生たちの応答にも示されているように、当事者になるかもしれない非専門家たちの率直な意見をも丁寧に取り込んでいき、暴力を容認しないという市民的責任を果たしていくこと<sup>24</sup>が暴力に対応する方法として理に適っているように思われる。

## 2. カマラ大司教の暴力論と世界変革ビジョン

胎児の「いのち」を守るための中絶医射殺の根拠を聖書の物語や言葉に求めたヒルの独善的な暴力肯定論とは違って、ブラジルの大司教エルデル・カマラ（Hélder Câmara; 1909-1999年）

---

<sup>21</sup> 中絶論争はアメリカ社会を二分する文化論争となった。これについては、荻野美穂『中絶論争とアメリカ社会——身体をめぐる戦争』（岩波書店、2001年）を参照。

<sup>22</sup> タラル・アサド著、菊田真司訳『自爆テロ』、岩波書店、2008年。

<sup>23</sup> Hélder Câmara, *Spiral of Violence*, London: Sheed & Ward, 1971.

<sup>24</sup> 新免貢「暴力に直面して——市民として責任を果たす——」『日本国際文化学会年報：インターカルチュラル』（2007年5月号）、62-66頁。

の『暴力の螺旋』は、暴力を社会構造との関連で考察し、世界変革ビジョンを全世界に向けて表明している。本書のフランス語版<sup>25</sup>は1970年、英語版<sup>26</sup>は1971年に出版されている。スコットランド人のアラステア・マッキントッシュ (Alastair McIntosh)<sup>27</sup>は、絶版であった『暴力の螺旋』をスキナで読み取り、ウェブ上で公開した。暴力が各地で横行し、混迷した現代世界の情勢に鑑みて、本書が再び読めるようになることが緊急に求められていると彼が認識したからである。本書のPDF版作成の直接のきっかけは、2006年7月30日、イスラエルがレバノンのカナを無差別攻撃し、数十名にも及ぶ子供たちが殺されたことである。同じころ、英国政府は、軍需物資を搭載してイスラエルに向かう途中のアメリカ合衆国の飛行機が燃料補給のためにスコットランド南西部のプレストウィック国際空港を使用することを許可した。彼はそのことに抗議する人々の中の一人であった。長きにわたって絶版になっていたカマラの著書がこういう政治的文脈で復活したことは、カマラ自身にもふさわしいことでもあろう。

ブラジル北東部のレシフェとオリンダの大司教を務めたカマラは、国内では共産主義者呼ばわりされ<sup>28</sup>、常に暗殺の危険にさらされていたが、1970年、多くの国々の諸団体は、彼をノーベル平和賞の受賞候補に推薦している。「日本・ラテンアメリカ関係日誌——1983年」<sup>29</sup>によると、1983年2月14日、庭野平和財団は「第一回庭野平和賞」をカマラ大司教に贈ると発表した。受賞の理由や選考経過はウェブ上で詳しく公表されている<sup>30</sup>。

カマラ大司教にはポルトガル語版や英語版の著作が数多くあり、その一部は日本語に訳されている<sup>31</sup>。わが国のカトリック系雑誌『世紀』でも、カマラ大司教の講演の日本語訳が紹介された時期がある<sup>32</sup>。大司教カマラに関する入門書としてフランシス・マクダノーによる選集<sup>33</sup>

<sup>25</sup> *Spirale de Violence*, Desclée de Broucker, Brussels, 1970.

<sup>26</sup> *Spiral of Violence*, London: Sheed & Ward, 1971.

<sup>27</sup> アラステア・マッキントッシュは、解放の神学の研究者であり、講演・執筆活動や大学の講義などを通して、貧困、暴力、環境問題などの現代世界の困難な諸課題に自前で取り組んでいる。

<sup>28</sup> 「貧しい人に食べ物を施すと、私は聖者と呼ばれる。貧しい人にはなぜ食べ物が無いのかと問うと、私は共産主義者と呼ばれる」。

<sup>29</sup> <http://repository.cc.sophia.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/9022> (上智大学発行『イベロアメリカ研究6(2)』、1984年11月28日、4頁)を参照。

<sup>30</sup> 「第一回庭野平和賞」 ([http://www.npf.or.jp/peace\\_prize/pdf/](http://www.npf.or.jp/peace_prize/pdf/))。

<sup>31</sup> 伊従直子訳『創造と環境』(フリープレス、1998年; Helder Câmara, *Quem Não Precisa de Conversão?*, São Paulo: Edições Paulinas, 1987)、佐藤三夫訳『抑圧からの解放——正義と平和への祈り』(中央出版社、1980年; Helder Câmara, *O Deserto é Fértil: Roteiro Para As Minorias Abraâmicas*, Rio de Janeiro: Civilização Brasileira, 1977; *The Desert is Fertile*, trans. by Dinah Livingstone, London: Sheed & Ward, 1974)など。説教「エキュメニカル対話と永久的宗教改革」(1967年12月、サンパウロのメソヂェスト教会神学校。高柳俊一編『近代カトリックの説教』、教文館、2012年、383-393頁)は、カマラ大司教の著作『時流に抗う戦い』(Helder Câmara, *Race Against Time*, London: Sheed & Ward, 1971, tr. from *Pour Arriver à Temps* by Della Couling)に依拠している。

<sup>32</sup> 「暴力、それは唯一の選択肢か」(『世紀』、222号、1968年、26-34頁)、「カマラ大司教との対話」(同、35-43頁)、「社会の不正義とキリスト教」(『世紀』、244号、1970年、2-15頁)。

<sup>33</sup> Ed. by Francis McDonagh, *Dom Helder Camara: Essential Writings*, New York: Orbis Books, 2009. この選集には、本稿に挙げた以外のカマラの著作——ポルトガル版と英語版の両方——とカマラ研究本が挙げられている。

が有益である。この選集は、カマラの著作やカマラ研究からの抜粋をテーマ別に、カマラ大司教の波乱の人生、思想的遍歴、行動を概観できるように編集されている。これを編集したフランシス・マクダノーは、英国のカトリック系週刊誌（*The Tablet*）の記者としての経歴もあり、海外開発カトリック基金のプログラムに関わっている。

### 1) 『暴力の螺旋』の基本構想と構成

本書は四十年以上も前の出版物とはいえ、圧倒的大多数の人々を人間以下の状況に閉じこめている貧困という暴力、そこから生み出される反抗の暴力、強者が貧者の要求を叩き潰す弾圧の暴力を「暴力の螺旋」と評し、一部に利益が流れる世界の経済システムを正面から批判している点で、今日の状況にも適合するメッセージを含んでいる。

この暴力の螺旋状態から逃れるためには正義をもたらすしかないとするカマラ大司教は、すべての人間の良心に対して訴え、解放をもたらす倫理的圧力により、先進諸国と発展途上諸国との経済格差の軽減、並びに、富める国々の中における特権階級と非特権階級との間の克服しがたい社会的・経済的不公平の是正を求める連帯を提唱している。

『暴力の螺旋』は三部構成である。「第一部 人類に対する脅威」は、「地球を眺める」「暴力が暴力を呼ぶ」「そしてその次に来るのが弾圧」「現実の脅威」の四項目、「第二部 有効な解決策」は、「武力による暴力が唯一の解決策か?」「ガンジーは失敗者か、それとも預言者か?」の二項目、そして「第三部 正義と平和を求める行動」は、「目的と展望」「障壁を超えて」「実際の見地」「全世界に関わる運動」「若者に対する訴え」の五項目にそれぞれ分けられている。

### 2) カマラ大司教の暴力論

以下、カマラ大司教は、暴力の実態を観念的ではなく、具体的な人間の現実として把握した上で、大学、マスコミ、宗教が果たすべき社会的責任を問い、さらに、世界中の人々に不正義是正のための戦いに連帯するように促す。

#### i) 貧困は暴力の三段階を生じさせる不正義であるということ

発展途上諸国においてであれ、先進諸国においてであれ、人間以下の状態にまで落ちぶれさせる貧困は、肉体的にも精神的にも倫理的にも異常を引き起こし、人類に対する脅威となっている。核兵器を保有する先進諸国は、貧困爆弾の重大な結果を把握していない。

貧困という不正義が一番の暴力である。この暴力は三段階を経る。貧困ゆえに展望も希望もなく、牛とかロバと同様の隷属状態に置かれた人間は、屈辱と不正義を味わう。こういう暴力的状況に直面して、腐敗した政府や、基本的な信条を実生活に転換させようとしない教会に失望した若者たちが蜂起する。これが第二の暴力である。当局側は社会秩序、国民の安全、自由

主義的な世界を維持するという口実の下にこの蜂起を弾圧する。これが第三の暴力である。時代に逆行しているように思われたくない独裁的な政府に対しては、世界からの倫理的な圧力が有効である。援助は不可欠であるが、十分ではない。国家間貿易政策の全面的修正をしない限り、貧困諸国はますます貧しくなり、富める国々をますます富ませ続けることになる。それゆえ、被抑圧階級の反発が強まり、暴力が拡大する仕方で、世界は暴力の螺旋に陥っている。

## ii) 大学、マスメディア、諸宗教の役割

世論に対する諸大学の影響、特に、先進諸国の名門有力諸大学の影響力は大きい。諸大学は世の中の諸課題と取り組む普遍的な責任を有する。しかし、諸大学は明日にでも新たな独裁者の職が任命されるかもしれないというのに、学問の使命に見合った方法をまだ見出していない。諸大学を直接的に公権力と、あるいは、諸大学に助成金を支給する財団の手を経て間接的に経済的権力と結びつける絆は、事態をどの程度説明できるのか。

また、マスメディアも途轍もない力を代表している。しかし、それは、国家によって操作される可能性があることを考慮すれば、予想外の弱点を持った巨人である。資本主義世界の先進諸国においては、マスメディアは巨大ビジネスになり始めている。ビジネスの利害が顔を出し始めたところで、ジャーナリストたちの自由は終わりとなる。

諸宗教は、大きな力を及ぼし得る。しかし、諸宗教は、資本主義陣営の諸地域では制度の中に巻き込まれる危険を冒している。諸宗教は、立派な信条を広める勇氣はあっても、それを遂行するだけの行動力がない。というのは、自分たち自身が無自覚的に社会システムに取り込まれ、影響されているからである。諸宗教は、現実から遠ざける力に変形されている。

## iii) 「正義と平和を求める行動」

「正義と平和を求める行動」は政治的・宗教的党派ではない。「正義と平和を求める行動」は、正義と愛の道こそが真の平和に通じていることを確信し、解放をもたらす倫理的圧力により憎しみと混沌からの自由の獲得を目指す善意の者たちの集まりである。カマラ大司教は以下のように呼びかける、「正義に飢え渴く世界中の皆さん、どうぞ、共に行進して下さい！ 不正義に苦しんでいる者たち！ 発展途上諸国の者たち！ 豊かな国々における恵まれない階層の者たち！ 貧しい国々の特権階級または豊かな国々の裕福な階級に属しながら、もはや不正義を認めず、それが第一の暴力であることを認識しない者たち！ 先進諸国世界と発展途上諸国世界との間で絶えず拡大しつつある隔たりの重大性を理解するだけの大変立派な地位に就き、生来、また職業上、流血の暴力よりも解放をもたらす倫理的圧力を優先させる科学技術者たち！ 流血と武器使用の暴力行為を選択したけれども、平和主義者たちの激しさこそが真の解決策ではないのかと思案し始めている者たち！ 今もなお、あるいは、昨日までは当局側で

あり、暴力に対して暴力で（実際は拷問を行使して）やり返してきたが、武器使用の暴力行為や憎しみに陥ることなく正義を要求する平和主義者たちの激しさを今や理解する者たち！」。要するに、「正義と平和を求める行動」は、発展途上諸国の社会的・経済的、政治的・文化的構造の変革、恵まれない社会層の差別撤廃、発展途上諸国と先進諸国との貿易から生じる利益の不均衡の根本的修正を迫るものである。

カマラ大司教は『ローマの信徒への手紙』4章18節を援用して、「正義と平和を求める行動」を採用する能力のある少数派を「アブラハム少数派」と呼ぶ。「アブラハム少数派」は、職場、学校、近所に、あるいは、ヘルメットを被った軍隊内部にも既に存在する。「アブラハム少数派」は、不正義と戦うために、「教皇庁正義と平和委員会」(Pontifical Commission for Justice and Peace) や「世界教会協議会」(World Council of Churches) などの国際的組織とも連携し、諸大学に対して新しい発展モデルを考案するように働きかけ、「鳩のような素直さと蛇のような賢さ」でもって政治家たちに接近することも求められている。

#### iv) 若者に対する訴え

まっとうな人間らしい世界を願い求めて、事実に対しては事実でもって異議申し立てを行い、論理に対して論理でもって異議申し立てを行う。心地よくない空気を真実として醸し出し、厳しい要求を正義として掲げるべきである。

### 3) 聖書に由来するレトリック

本書では、ブラジルの貧困の中で培われたカマラ大司教の霊性がほとぼしる仕方で、聖書の言葉が示唆されている。本書で特に注目に値するのは、「アブラハム少数派」という表象である。「アブラハム少数派」は「正義と平和を求める行動」に連なる者たちであり、不正義に立ち向かう戦う少数派として世界中のあらゆるところに存在する。関連する聖書箇所『ローマの信徒への手紙』4章は、『創世記』に登場するアブラハムを例にとり、信仰の模範として解釈している。そこでは、アブラハムは「望みに逆らって望みつつ信じた」とされているが（『ローマの信徒への手紙』4章18節）、不正義に立ち向かう者たちもまた、望みに逆らって望みを抱いていることになる。構造的な不正義は希望を持たないと思えるほど解決困難な深刻な課題であるにもかかわらず、彼らはそういう構造の転換への希望を抱き続ける。「アブラハム少数派」という表象は聖書批評学的な厳密な釈義から引き出されたのではなく、暴力の螺旋状態という現実の文脈の中で、それに取り組む者たちの生き方をアブラハムの模範的信仰と類比させて捉え直したものであり、彼の他の著作においてもしばしば見出される<sup>34</sup>。それはまたカマラ大司

<sup>34</sup> Dom Hélder Câmara, *The Desert is Fertile*, New York: Orbis Books, 1974, pp. 12-14, 47-51, 54-55, 56-58, 62-63.; *The Conversations of a Bishop: An Interview with José de Broucker*, London: Collins, 1979, pp. 180-184.

教自身の生き方でもあった。行動を起こす者たちに求められる「鳩のような素直さと蛇のような賢さ」（『マタイによる福音書』10章16節）は、イエスが困難なことが待ち受ける状況の中へ弟子を派遣する際に語った説教の中に見出される表現であるので、困難な課題に立ち向かおうとする「アブラハム少数派」の文脈とも適合している。

カマラ大司教は、『創世記』1章において描写されている神の創造の秩序に絶大な信頼を寄せ、これを自らの行動理念の霊的源泉として深い洞察を随所で開陳している。たとえば、「肌の色、唇または鼻の形が何であれ、背丈がどれだけであれ、人間は人間以下でもなければ、人間以上でもありません。人間なる神の被造物です。頭と心臓がついており、希望や夢があるのです。さらにもっと重要なことは、天地の創造者としての父なる神は、人間に関わり、人間としての充実感をもたらす全計画をお持ちです」「天地創造の始めにおいて神の息が水の表を覆ったのと同じように、神の霊の息吹は地の表を覆うことでしょう」などの言葉は、『創世記』1章を敷衍したものであることは容易に察せられる。そこには、世界に不正義がまかり通ることが神の創造の秩序の破綻であるという確信が込められているであろう。

政治体制の障壁を超えて「アブラハム少数派」を自由に導くのは聖霊であるとするカマラ大司教の考え方は、「風は思いのまま吹く」（『ヨハネによる福音書』3章8節）という言葉から引き出されている。ここでは「風」（pneuma）は「霊」を意味する。この他に、「神は愛である」（『ヨハネの手紙一』4章8節）、「義の実」（『フィリピの信徒への手紙』1章11節）などの言い回しも聖書に由来する。「平和を愛し、平和が正義の実である」という言い方は『ヤコブの手紙』3章18節（＝「義の実は、平和を創り出す者たちによって、平和のうちに蒔かれる」）を、「暴力が暴力を呼ぶ」という表現は『ホセア書』4章2節（＝「流血に流血が続く」）を、それぞれ思い起こさせる。「世界のある地域が平和な状態を保ってきたとします。しかし、平和——深みでは腐敗物がふつつつと沸き立っている沼地の平和——が不正義に基づいているならば、その平和は偽りであると確信して差し支えありません」、「月明かりのよどんだ沼地と同じような見せかけの美しさを備えた偽りの平和の事例もあることが知られています」などと述べられているように、カマラ大司教は偽りの平和の実態を見抜いているが、その鋭い洞察は、「平安がないのに、『平安』『平安』と言っている」宗教指導層や社会的有力者を批判した『エレミヤ書』7章14節の文脈とも適合する。国家権力に利用されやすい弱点を抱える巨大マスコミが「意外な弱点（feet of clay）を持った巨人」と評されているが、これもまた聖書に由来する表現である（『ダニエル書』2章31-35節）。ガンジーを平和行動の模範とすべきと考える大司教カマラは、「ガンジーよ、あなたの勝利はどこにあるのか」と問いかけているが、これは復活論を展開している『コリントの信徒への手紙一』15章55節（＝「・・・死よ、お前の勝利はどこにあるのか」）から引き出されたものであろう。猶予が許されないほど行動を起こすべき時が到来しているという意味で「時が迫っている」と述べられているが、これは、邪悪な世界から新しい世

界への転換に絶大な関心を寄せる『ヨハネの黙示録』1章3節と22章10節を想起させる。

このように、『暴力の螺旋』には、明示的であれ暗示的であれ、聖書の言葉、あるいは、そこから触発された文言が多く認められる。貧困という不正義が暴力の形となっている状況の中で聖書の言葉が靈性豊かに解釈され、捉え直されており、説得力がある。カマラ大司教の聖書解釈においては、マルクス主義がキリスト教から引き離されることなく、マルクス主義が触媒となってキリスト教の未発見のメッセージを見出す一助となっている。人々を苦しめている現実世界における不正義の存在という文脈の中で聖書の言葉がその意味を問い直されたと言うべきである。

#### 4) 過酷な現実のせめぎ合いの中で

カマラ大司教は、マルクス主義や科学技術を批判しつつ、その一方で、大衆を巻き込むことを有効な戦術として訴える。彼は、単なる解放の神学者ではない。第二次世界大戦後のポストコロニアルの状況に直面して、長年にわたってその都度支配者たちに仕えてきたキリスト教の在り方を反省した点では、他の状況神学の主唱者たちと共通している。しかし、彼は、アブラハム少数派への賛同者がキリスト教界内外のあらゆる組織に存在しうることを認め、その視点は支配者側と被支配者側の両方に向けられている。世界の経済構造の根本的転換が彼の最終目標であり、世界が陥っているとされる暴力の螺旋状態は政治的文脈を抜きにして論じることができない。彼は世直し論を展開したとも言えるが、ヴァチカン側は結局、彼を受け入れたのである。ここでわれわれが注目すべきは、彼が強調した重要な観点の一つ、すなわち、大衆の言葉で語り、彼らの考え方で考えるという手法である。彼自身が叙階への途上で習得したギリシア・ラテン文学の教養や神学的知識などは、大衆の頭を素通りすることを彼は見抜いていた。知識人階級や既成の組織が意外にも役に立たないことを彼は経験知として知っていた。「貧困爆弾」という衝撃的なレトリックからもわかるように、貧困は、核兵器という圧倒的暴力をもたらした科学技術よりも恐ろしいものである。「周縁的」であることを、彼は、ヒッチハイクをして車を待っているにもかかわらず車が次々と通り過ぎていき、取り残されている状況にたとえた。そういう仕方に取り残された人々を生んでいる構造を転換しない限り、不正義という暴力は抑制されない。グローバル化がより複雑化・多様化し、過酷な現実のせめぎ合いが続く現在、経済・社会の構造的転換を意図したカマラ大司教の暴力論は、有効な暴力抑止論として注目されてしかるべきであろう。また、カマラ大司教の靈性と実践は、マルクス主義の影響を受けつつも、聖書に豊かに触発される仕方で根拠づけられており、宗教の社会的貢献をめぐる今日の議論の文脈においても再評価されてもいいであろう。

### 3. 暴力に結びつくディーセンシィー

ヒル牧師は聖書テキストによって自らの暴力行為を正当化したのに対して、カマラ大司教の暴力論は、暴力を構造的に生み出す貧困を社会正義の問題として取り上げ、暴力に至るプロセスを明らかにしている点で、宗教者の単なる理想主義を超え、現実批判の水準を保持していると言えよう。カマラ大司教は、社会構造の根幹に関わるその現実批判のゆえに、暗殺の対象とさえなった。このように現実批判は、常に自らの身にリスクを招く恐れがある。その内容に正しさを含んでいても、体制側の枠組みを批判する現実批判の言説は、礼節、品位、秩序正しさ、恭しさ、行儀良さという意味での「ディーセンシィー」(decency)を欠いていると見なされ、社会的立場の喪失という深刻な事態を招きかねない。「ディーセンシィー」は本来、社会のいろいろな局面における人間関係において有益に働くと考えられる。しかしながら、「ディーセンシィー」を身に着けているとされている支配体制側は、利害に反する言説に直面した時、「ディーセンシィー」を基準としてこれを抑圧することもある。つまり、「ディーセンシィー」は、社会的抑圧に加担する暴力的機能も果たし得る。暴力を認めない「ディーセンシィー」が暴力に結びつくこと自体、論理の矛盾というべきであるが、実際は起こり得ることでもある。

最近のその具体的な例として、スティーブン・サライタの終身雇用契約解除を挙げることができる。パレスチナ人の人権活動家であり、先住アメリカ人を研究するスティーブン・サライタは、一昨年、二千人以上の子どもが殺されたイスラエルのガザ攻撃をツイッター上で厳しく非難した。しかし、それが原因で彼は、名門イリノイ大学での終身雇用の採用を取り下げられた。大学理事会側は、彼には「シビリティ」(civility)が欠けるという立場を表明した。「シビリティ」も「ディーセンシィー」と同様、支配者のレトリックになりうる。この背後には、米国との重要な関係にあるイスラエルを批判するような人物を採用することはまかりならぬとする有力者たちから資金援助取り消しの脅しがあったとされている。しかし、全米の学者たちがサライタの採用回復を求めた嘆願書に署名し、講義をキャンセルする講師たちもいた。米国大学教授協会は、「学問の自由と適正な手続に反している」として大学側の対応を批判した。大学総長は、サライタの採用取り消しを記したメールの隠蔽に関与したとして辞職する事態となった。この事例は、学問の自由、言論の自由、大学世界のあり方をめぐって大きな騒動へと発展した。この騒動は、大学の自治や表現の自由などの諸問題とも絡んでおり、米国のみならずわが国においても、学問世界と社会システムとの関係のあり方について、一石を投じていると言えよう。この騒動に関する一部始終は本稿の冒頭で言及した当事者自身の告発本に詳細に紹介されている。告発本の題(『無礼な慣習—パレスチナと学問の自由の制限』)自体が、この騒動の核心部分を言い当てている。

## 結びに代えて——「ディーセンシイー」観の見直し——

暴力を覆い隠す「ディーセンシイー」「シビリティ」などの支配者側のレトリックに関して、かつてハーヴァード大学神学部で教鞭をとったスウェーデンの聖書学者クリスター・ステンダールの論考（「憐れみと裁き」）<sup>35</sup>——公民権運動の文脈の中で行った演説を原稿化したもの——が重要な示唆を提供しているように思われる。クリスター・ステンダールは、その論考において、バビロン捕囚後に帰せられる『イザヤ書』40章1-8節を取り上げ、従来の神学的解釈——支配する側と支配される側の両方が救われるとする救済史的解釈——を正面から批判し、そこには、力ある者たちの行く末がはっきりと言い表されていると主張する。たとえば、「人はみな草だ。その麗わしさは、すべて野の花のようだ。主の息がその上に吹けば、草は枯れ、花はしほむ。たしかに人は草だ」という言葉は一見、人の命のむなしさや儂さを言い表しているように受け取られがちであるが、実際はそうとは思えない。「人はみな草だ」の部分は、タルグームのアラム語訳では「すべて邪悪な者たちは草のようだ」の意味に言い換えられていることをここで考慮に入れる必要がある<sup>36</sup>。クリスター・ステンダールによれば、それはむしろ、人の命の儂さではなく、抑圧された人たちが慰められ、力ある者たちが完膚なきままに立場を失い、それが神の正義であり、神の言葉であることを宣言しているのである。

「神々は有力者を亡ぼして無きものを高く上げる」（『トロイアの女』612-3）というトロイアの王妃ヘカベの嘆きを持ち出すまでもなく、有力者を亡ぼして無きものを高く上げる。それが人類の経験知であり、それがまた神（々）のあしらい方である。キリスト教の神学的言説においては、神が人間に求める「ディーセンシイー」をそういう水準で理解せず、抑圧された人たちと力ある者たちの両方に神の救いがあると弁証法的に論じられることが多い。しかし、自らの生き方の転換をせずに両方とも救われることが、神の求める「ディーセンシイー」であるかどうかは、抽象的な神学的弁証法によってではなく、事柄に即して問われてしかるべきであろう。不作法をしない、公平で、思いやりと良識があるという意味での「ディーセンシイー」は、個人的な見た目の穏やかな態度や上品な姿勢を超えて社会的次元のものと結びついてこそ輝きを放つと考えられる。「ディーセンシイー」が社会的に機能するためには、持てる側が自らの特権を失い、持たざる側が自らの失われた立場を回復することが前提となる。

最後に、暴力を否定する「シビリティ」「ディーセンシイー」が異なる立場を排除する暴力的かつ陰質な体制維持イデオロギーとしても機能し得るとする二律背反は、今日に生きるわれ

<sup>35</sup> Krister Stendahl, "Judgement and Mercy," in *Paul Among Jews and Gentiles*, Philadelphia: Fortress, 1976, pp. 97-108.

<sup>36</sup> *The Chaldee Paraphrase of the Prophet Isaiah*, trans. by Rev. C. W. H. Pauli, London Society's House, 1871, p.132.

われの目の前に立ちはだかる大きな壁である。これに向き合う思想の構築が急務であるが、この作業は容易ではない。

教養や教育で涵養される「ディーセンシイー」「シビリティ」は市民社会において不可欠な要素であるが、それ自体、支配者側の属性でもある。それゆえ、支配者側がそれを楯に取る時、スティーブン・サライタの契約解除問題が如実に物語っているように、社会の犠牲システムに起因する暴力的状況を覆い隠す抑圧的機能を果たし得ることを見落としてはならない。

(2016年4月12日受領、2016年4月26日受理)

(Received April 12, 2016; Accepted April 26, 2016)

## Religion and Violence, and Decency

Mitsugu SHINMEN

In his erudite book, *Terror in the Mind of God: The Global Rise of Religious Violence* (2003), Mark Juergensmeyer, sociology professor at the University of California, convincingly shows that religion provides the mores and symbols which make horrific bloodshed easier to vindicate and that it also carries with it the possibilities for peace. Supporting his theory, this article focuses upon the destructive alliance between violence and religion, while evolving a working theory of anti-violence. Among the topics discussed are Paul J. Hill's apologia, "Defending The Defenseless" (2003), Dom Hélder Câmara's classic work of liberation theology, *Spiral of Violence* (1971), Krister Stendahl's speech, "Judgement and Mercy" (1972), and Steven Salaita's controversial book, *Uncivil Rites: Palestine and the Limits of Academic Freedom* (2015).

Excommunicated Presbyterian minister Hill shot an abortionist and his security escort to death, raising his voice, "One thing's for sure, no innocent people will be killed in that clinic today." In his apologia, Hill points to scriptural citations as proof texts to justify his killing. A religious maximalist, Hill is convinced that religion ought to permeate all aspects of human existence. He was sentenced to death by lethal injection and was executed. As Bal Mieke, professor of theory of literature at the University of Amsterdam, rightly claims, "the Bible, of all books, is the most dangerous one, the one that has been gifted with the power to kill" (*On Story-Telling*, 1991). Hill's apologia clearly shows that it still has that power. In his suggestive article, "The Zeal of Phinehas: The Bible and the Legitimation of Violence" (*JBL* 122/1, 2003), J. J. Collins, professor of the Old Testament at Yale, argues cogently that the Bible has been taken to confer a degree of certitude which transcends human argumentation and that although it is an illusion, this certitude may lead to violence.

We may think that one way to decrease religiously justified violence could be to heighten the awareness and presence of religion as the font of ethical values, so that religious communities do not have to struggle for recognition and respect. Religion is not just part of the purely private arena that the state must never disrupt. It is suggested that individuals, both within and without faith traditions, should educate themselves about the history, literature, and methods of interpretation found within religious traditions, so that they can decide for themselves whether or not they will support scripturally justified violence in the public square. I teach a course on "Religion and Society" to fe-

male college students, and these sophomores made sharp and severe responses to Hill's apologia, voicing their own views on his understanding of the biblical justification for his violence. College education, hopefully, will help to mediate between the citizen and this maximalist brand of evangelical Christianity.

Religion, on the other hand, affords the absolute basis for peace and justice. In his insightful *Spiral of Violence*, Câmara, archbishop of Recife, Brazil, says: injustices are a form of violence. It attracts secondary violence: the revolt of the oppressed. This generates in turn tertiary violence: repression by the powerful to secure their privileged position. He appealed strongly to people to act for justice and peace, demanding moral pressure on the rich and the privileged so that a structural change might be started in various parts of the world. His stern call to justice and peace may sound harsh to the haves, but it is inflected with a joy-filled, mystical love of God. He gained an international reputation as a dedicated champion of human rights during the era of military dictatorship, despite the fact there was censorship in full force at home.

Krister Stendahl, world-renowned Swedish biblical scholar at Harvard, follows in the same line of thought when he reinterprets Isaiah 40: 3-8 within the context of the civil rights movement in the United States in his unpublished speech, "Judgement and Mercy". He insists that the content of Isaiah's message of comfort consists of the downfall of the powerful, as well as the announcement that those who hunger and thirst for justice are finally going to be satisfied, rejecting all homogenizing readings of the lambasting critique of Isaiah. In his reinterpretation of Isaiah 40: 3-8, he gives a deep insight into justice for the oppressed, which we may call divine decency.

More recently, the University of Illinois had rescinded its offer of a tenured professorship to Steven Salaita, a Palestinian scholar of indigenous peoples, due to his alleged anti-semitic remarks in his tweets in connection with Israel's assault on Gaza and killing of thousands of Palestinians, mostly women, the elderly and children. Chairman of the Board of Trustees Christopher Kennedy describes Salaita's tweets as "blatantly anti-semitic", because he affirms that a university should be not only a place of sharp discourse, but also a place of civility. Civility, however, is a form of castigation in the words of Salaita. We may say it is another name for violence. Whether civility or decency, it is a by-product of deeply conformist cultures and an administrative convenience, and moreover, feigns gravitas where violence prevails. We have been poignantly taught these two words have been abused by the powerful. His case reminds us all of the need to defend academic freedom and to protect those who challenge the powerful and reject their use of violence.

資料1

## 暴力の螺旋<sup>37</sup>

エルデル・カマラ

### 1. 人類に対する脅威

#### 1) 地球を眺める

どこにでも不正義があります。それを見つけるのは朝飯前です。不正義にはいろいろな種類があり、程度も様々です。それでも、不正義は不正義です。

発展途上諸国では、こうした不正義は——ひょっとして他の地域では知られていないかもしれませんが——、何百万人もの人間たち、神の子たちを人間以下の状態にまで落ちぶれさせ、悲しませているのです。

しかし、「人間以下の状態」とはどういうことでしょうか。それはちょっと、きつすぎる言い方ではないのでしょうか。煽っているような感じではないのでしょうか。断じてそうではありません。本当によくあることですが、貧困の遺産と言えるようなものが存在します。貧困は、きわめて凄惨な戦争とちょうど同じ程度に命を奪います。しかし、貧困は命を奪うこと以上のものです。（ピアフラのことを考えていただければと思いますが）、貧困は、肉体的な奇形、心の歪み（飢えが原因となっている精神薄弱の事例が多数あります）、倫理的欠陥（隷属状態にあるために表に現われていないが、現実には存在している人々が、これも運命とあきらめてへこたれ、物乞い的な考え方にまで落ちぶれ、展望も希望もないまま生きています）を生み出しています。

しかし、私たちは注意深くあらねばなりません。不正義は発展途上諸国の独占物ではないのです。不正義は先進諸国にも存在します。不正義は、社会主義者側にあるのと同じくらい資本主義者側にたくさんあります。

資本主義世界では、最も豊かな国々においてさえ、恵まれない下層社会が存在します。カナダでは、それが「暗い地域（gray belts）」（スラム化しつつある地域を指す一訳注）と呼ばれ始めています。

---

<sup>37</sup> テキストは、下記に依拠。

<http://www.alastaircintosh.com/general/spiral-of-violence-camara.pdf>

周知のように、リンドン・ジョンソン大統領（1963-69年）は、アメリカ合衆国内における貧困と戦うことを宣言しました。彼の話では、三百万もの北米人たちが人間以下の状態で暮らしているそうです。先進諸国において人間以下の状態とみなされているものは、発展途上諸国のそれとまったく同じというわけではありませんが、豊かな国々における貧困と富との格差が啞然とするような対照をなしている場合があることも事実です。

社会主義世界では、実際面では（理論は違うかもしれませんが）、ソビエト社会主義共和国連邦は、共産中国と同様、社会における多様性を容認していません。

社会主義陣営の二つの大国間において続いている闘争はそれ自体、問題を明らかにしていません。しかしそれでも、両者は、巧みな論法に基づく物質主義と盲目的な服従を押し付けています。独裁制、密告者をそそのかすこと、猜疑心や押し付けられた自己批判や不安が支配している状態が時代の趨勢です。

しかし、先進諸国と発展途上諸国との関係を見れば、不正義はまったく異なる様相を帯びてきます。発展途上諸国は再度、国連貿易開発会議（UNCTAD）<sup>38</sup>を通じて先進諸国との対話を開催しようと努めてきました。両帝国の利己主義的な無関心は似ています。資本主義的勢力圏はアメリカ合衆国を首領とし、社会主義的勢力はソビエト社会主義共和国連邦の支配下にあります。

援助は確かに役に立っていますが、いつも不十分なものです。途轍もない不正義に対応するように現在の国家間貿易政策がまとめられていますが、『諸国民の進歩』(*Populorum Progressio*)<sup>39</sup>が持っていた不正義弾劾の勇気を持たない限り、問題の核心にはどうしても届きません。

ピアソン報告 (*Partners in Development*)<sup>40</sup>でさえ、国家間貿易問題に関する言及は及び腰でありながら、たとえば、人口爆発のような他の諸問題については詳述しています。こうなると、人口問題が存在するとしても、第三世界としては、外部から押し付けられた大規模な家族計画を断じて受け入れるわけにはいきません。また、発展というまさに複雑な問題がもたら人口問題の水準に単純化させることを断固として認めるわけにもいきません。こういうことは実際、責任逃れ、口実でしかなく、世界規模の不正義の問題をはぐらかす別の方法なのです。

今のところ、先進諸国世界は、核兵器を保有して、誇りと自信もありますので、弱点を抱える発展途上諸国世界を嘲笑するだけの余裕があると考えています。しかし、水爆を所有する側は、貧困爆弾の範囲とその重大な結果を把握しているでしょうか。

<sup>38</sup> United Nations Conference on Trade and Development.

<sup>39</sup> 『大社会問題』(*The Great Social Problem*, London: Catholic Truth Society, 1967)として翻訳出版された教皇パウロ六世の回勅(1967年3月26日発布)。

<sup>40</sup> 国家間発展に関する委員会報告(※大来佐武郎訳『開発と援助の構想』、日本経済新聞社、1969年)。

これこそが、次の十年の発展の始まりにおける人類の状況に他なりません。真の発展は、人間全体とすべての人々の発展を意味するのであれば、実際、この世界には真に発展した国はひとつたりともありません。

それよりもむしろ、もっと危険をはらんだ免れがたい結論があります。私たちがそのことに注意を促さなければならぬのは、それが悲惨な結果を招くからです。つまり、それはこういうことです。発展途上諸国における種々の不正義、先進諸国世界と発展途上諸国世界との関係における種々の不正義をよく観察していただきたい。そうすれば、不正義は至る所で暴力の形となっていることがおわかりいただけるでしょう。不正義はどこにおいても基本的には暴力、第一の暴力であると言って差し支えないし、また、そう言うべきです。

## 2) 暴力が暴力を呼ぶ

誰も奴隷に生まれるのではありません。誰も不正義、屈辱、拘束に苦しむことを求めているのではありません。人間以下の状況を強いられている人間は、泥の中でもがきながら進む動物——牛とかロバ——と同じです。

一部の特権集団の利己主義は、数多くの人間たちをこのような人間以下の状態に追いやっています。そこで人間たちは束縛、屈辱、不正義に苦しんでいます。展望も希望もないまま、彼らの状態は奴隷の有様です。

こうして暴力がはびこりました。この第一の暴力が第二の暴力、すなわち、反乱を招きます。抑圧されている側自身と若者層のどちらも、よりまっとうな人間らしい世界を求めて断固として戦う決断をしたのです。

確かに、大陸によって、国によって、町によって、第二の暴力には相違点、程度、微妙な違いが種々ありますが、総じて言えば、現代世界では抑圧されている側は目を大きく開けています。

当局と特権階級は、「破壊活動分子」「扇動者」「共産主義者」と呼ばれる外部の手先たちの存在を警戒しています。

そういう者たちが抑圧されている側の解放を求めて闘い、武器使用の暴力行為を選択した極左のイデオロギーに傾倒している場合もあります。一方、宗教心に動かされている者たちもいます。彼らは、宗教が民衆の阿片として、異質で現実から遠ざける力として解釈され、実践されることにもはやがまんできず、人間以下の状態に閉じ込められている者たちの人間としての発達に役立つように宗教を実践したいと願っています。

当局と特権階級は、これらの二つの集団をいっしょくたに扱っています。当局と特権階級から見れば、（聖職者であれ一般信徒であれ）宗教の名によって根本的改革のために、社会構造

の転換のため力を尽くしている者たちは、宗教を捨てて政治に走り、左翼思想にはまり込んでいるとは言えないまでも少なくとも共産主義への道を備える間抜けどもということになります。

こういう意見に対しては、主として二つの反論があります。当局と特権階級は、「扇動者」の存在がなければ、抑圧された大衆は目を閉じてなされるがまま動けないだろうと思いついています。

今日、これだけの交通手段や（トランジスタラジオなどの）通信手段が利用できる以上、思想の流布とか情報の拡大を防ぐことができると考えること自体、ばかげています。

次に、画一的で強迫観念のような反共産主義の原因には、いろいろなばかばかしさがあります。その最たるものは、不正義に取り組むことによって「共産主義への扉が開かれる」がゆえに、不正義を維持するというばかばかしい考えです。

抑圧された大衆が直接行動の機会を持っている諸地域では、彼らは、多かれ少なかれ、徹頭徹尾の激しい長期にわたる世論喚起運動に関わっています。

希望がないために大衆が一種のあきらめの境地に陥る時、あるいは、あまりにも過激な反対行動が大衆をちょっとの間おびえさせる時、蜂起するのは若者です。

若者はもはや、特権階級が自らの特権を捨てることを辛抱強く待つことができません。若者は、政府が特権階級とあまりにも結託している例を数多く見て知っています。若者は、教会に対する信頼を失っています。というのは、教会は、立派な諸原則——偉大なテキスト、素晴らしい結論——を主張していますが、少なくともこれまでのところ、基本的な信条を実生活に転換させようと決心することさえないからです。

若者はますます、急進的な行動と暴力に走りつつあります。

若者が、正義を求める理想主義、情熱、渴望、よりどころへの熱望の勢力となっている地域もあります。一方、同じ熱情でもって、過激主義者のイデオロギーを採用して、町や田舎で「ゲリラ戦」の準備をしている地域もあります。

世界のある地域が平和な状態を保ってきたとします。しかし、平和——深みでは腐敗物がふつふつと沸き立っている沼地の平和——が不正義に基づいているならば、その平和は偽りであると確信して差し支えありません。

暴力が暴力を呼びます。私たちは、次のことをひるむことなく絶えず繰り返し訴えましょう。すなわち、よりまっとうな、より人間らしい世界を求めて戦う決意をした被抑圧者側からであれ若者からであれ、不正義が暴力を引き起こします。

### 3) そしてその次に来るのが弾圧

衝突が市街地で表面化する時、すなわち、第二の暴力が第一の暴力に抵抗しようとする時、当局側は、暴力の行使を意味するとしても、社会の秩序を維持し、あるいは、再び確立する義務が自分たちの側にあると考えます。これが第三の暴力です。当局側の暴力はもっとひどくなることがあります。以下のことがますます常態となりつつあります。すなわち、暴力の論理によって、当局側は、社会の安全にとって実際に重要であるような情報を得るために倫理的・物理的拷問を行使しています——拷問によって引き出されるどんな情報も注目度が一番低いかのようであります！

先進諸国においては、発展途上諸国において行使されている拷問に反対する抗議の声がしばしば上がっています。その意図はきわめて暖かく、非常に好い成果を挙げています。それは、解放をもたらす倫理的な圧力です。つまり、政府は、世界の目から見て、独裁的で時代に逆行しているように思われたくないものです。

しかし、いかなる先進国も、幻想などを一切抱く必要はありません。どこにおいても暴力は起きるものです。不正義に直面すれば、どこにおいても被抑圧者側とか若者の抗議行動は広がるものです。どこにおいても、抑圧者の世界においては、そういう抗議が混乱した感情を何とか引き起こすものです。

豊かな諸国の一部の大学が——若者の度を越した抗議行動（建物占拠、焼き討ち、血なまぐさい戦い）に対抗するために——政府からの特別な権限を求め、獲得したことは本当でしょうか、あるいは、本当ではないのでしょうか。その気なら学長が今や緊急事態を宣言できそうな場合もあります。

心理学者たち、社会学者たち、並びに、教育者たちが若者の怒り、募るばかりの彼らの反感心、彼らの絶望を予感しなかったのは、どうしてなのでしょう。若者の爆発が予測され、予感され、回避されたかもしれないこと、また、若者の世論喚起運動において、根っからの活動家によって利用された諸要求においてさえ、真実で正しいことは何でも認めることができたかもしれないのではないのでしょうか。暴力と力に訴えるとは、何と悪い見本であることでしょうか。抗議行動が広がれば、政府は明日にでも諸大学の方からもすでに入れ知恵されていることでしょうか……。

高い文化水準の人々でさえ彼らの国民生活の混乱時においては独裁政治に沈み込んでしまっていることを誰が覚えていないのでしょうか。しかも、高い文化水準の人々の間でさえ、情報獲得という相も変らぬ口実の下に信じがたい残虐行為が目撃されています。

極左と極右の両者、及び、抗議行動の高まりを認識し始めている民主的支配体制から利用さ

れる心理戦争は、自らを科学的と称しています。

それは、いにしへの異端審問です。核兵器と宇宙旅行時代の科学技術はその支配下にありません。

過去から見て、あちこちで、典型的な反発から見て、第三の暴力——社会秩序、国民の安全、自由主義的な世界を守るという口実の下における政府による鎮圧——は、発展途上諸国の独占物ではないことを正直に認めましょう。

暴力の苦しみに陥る危険性のない国家はこの世界には存在しないのです。

#### 4) 現実の脅威

世界における不正義がますます悪化しかねないという現実の危険があるのでしょうか。貧困諸国の未発達状態と貧困に取り組む先進諸国の努力をどう考えましょうか。自分たちの国における未発達の階層をなくそうとする先進諸国の努力をどう考えましょうか。

開発途上諸国においては、基本的改革以来、社会・経済的、政治的、文化的構造の変革は、理論上のことにすぎず、常に同じ結論にたどり着いています。すなわち、豊かな者はますます豊かになり、貧者はますます貧しくなるということです。

先進国における「貧困との戦い」の最もよく知られている例は、アメリカ合衆国です。ベトナム戦争は、三千万人もの北米人を人間以下の状態から無理に引き出そうとする平和のための戦争を組み入れました。

今日、ベトナム事情の正確な成り行き、アメリカ合衆国全般の生活に対する影響、特に、世界で最も豊かな国の市民の間において生きている何百万人もの「貧しい人々」に対する影響を予測することは容易ではありません……。

資本主義陣営のどの国の社会構造においても変革の明確な兆しは見えていません（社会主義陣営にも、いつかは表面化しますが、重大な諸問題があります）。

豊かな人たちは、自分たちの国の人々のためにも、第三世界のためにさえ、援助話には乗ってくるものです。しかし、援助話は、正義、人権、構造改革……について大いに語るためには行われません。

国連貿易開発会議（UNCTAD）は、大いなる未知の世界となっています。国民総生産の一パーセントとか二パーセントに関連する議論をどう考えるべきでしょうか。国民総生産はそれ自体、先進諸国世界と発展途上諸国世界との関係という問題の本質そのものがまったく理解不可能であることを証明しています。援助は不可欠ですが、十分ではないのです。誰かが国家間貿易政策の全面的修正に着手する勇気と知性を持つに至るまでは、貧困諸国は、ますます貧しくなり、富める国々をますます富ませ続けることになるでしょう。

しかし、被抑圧階級の反発もまた、ますます厳しくなりつつある兆候をはっきりと見せています。その兆候を封じ込めて現れないようにしておくことは、無理です。世界で起こっていることがどういう事柄であるかを知るだけでも十分です。過去の被抑圧階級、虐げられた人々、気弱な人々が自らの目を開き、気づき、勇気を奮い起こしつつあります。

そしてそこには若者がいます。学生時代が終わってから若い批判者たちはおとなしくなり、身が安定し、中産階級となる傾向があるものです。しかし、情熱を消すまいと覚悟する若い人々もいます。

世界は、被抑圧階級や若者から生じた争乱、抗議行動、暴力で前途多難です。誰が政府側の対応強化に関して幻想を抱くでしょうか。

私たちの時代においては威張り散らす立憲政府や独裁政府に屈服している国々がいかに多いかを考えるだけで十分です。地図を見て、軍部支配下の国々の数を数えてください。

そういうわけで、暴力の拡大、すなわち、世界が暴力の螺旋に陥っているという現実の脅威があるというのが、直面せざるを得ない結論なのです。

## 2. 有効な解決策

### 1) 武力による暴力が唯一の解決策か？

人類が暴力と憎しみに飲み込まれる脅威にさらされている中、幻想で自らを慰め、偽りの解決策で自らを元気づける権利は私たちにはありません。困難で大胆な解決策がひょっとして真の解決策かもしれないのに、そういうものから私たちの注意をそらすことが偽りの解決策の主たる欠点です。

勇気を出して自らに問うてみて下さい。非暴力的な行動が鎮静剤として役に立たないのでしょうか。武器を使用した暴力は別として、発展途上国が未発達状態から引き裂かれる機会はあるのでしょうか。それとも、豊かな国の未発達の階層が国民全体の一般的な発展の水準に到達する機会はあるのでしょうか。

この問いに答える最初の試みとして、武器使用の暴力行為の現実の可能性を検討してみましょう。もっと多くのベトナムを作るのが解決策であると私たちに明言する声が種々あります。その場合、ベトナムに関する真実、特に人々の状況に関して調べることが重要です。

あけすけに言うと、状況は次のように要約できます。すなわち、ベトナムは、資本主義の帝国と社会主義の帝国が戦闘で渡り合っている戦場です。

北米の兵士と南ベトナム民族解放戦線の兵卒として連なる少年とを同列に置くことは、恐ら

く不当であるように見えることでしょう。南ベトナム民族解放戦線は、純粋な気持ちで単純に祖国を守り、最終的には平和に暮らす権利を得ることを願い求めています。そして、こうした人々の中には、仏教者もカトリック教徒も間違いなくいることでしょう。

しかし、ベトナム戦争のためにアメリカ合衆国は年間二百七十億ドル、つまり、一日につき七千四百万ドルの費用をかけていることがわかっている時、北ベトナムに投下された爆弾がすでに、第二次世界大戦中ドイツとその同盟国に投下された爆弾の量の倍にもなっている時、アメリカ上院議会で、殺害された一人一人のベトナム人のためにアメリカ合衆国は三百五十ドルの費用をかけていることを暴露する発言に耳を傾ける時、ベトナムにまつわる勇壮ぶりがいかに英雄的なものであろうとも、別の帝国が同じような費用を払って、同等の殺傷能力のある近代兵器を供給しない限り、アメリカの勝利は間違いないはずでしょう。それでいて、アメリカの指導層は、ベトナムにおける勝利が事実上不可能であるとすでに認めているのです。

支配するためにアメリカによって用いられる財力と、祖国防衛のために南ベトナム民族解放戦線によって役立てられるそれとの比較は馬鹿げていると言われ続けることでしょう。ここに、ベトナム戦争の最大の悲劇と深刻な教訓があります。つまり、民族解放戦線側は、共通の敵との戦いの時における暗黙の同盟協定を望んで受け入れ、その一方で、資金を提供する帝国側から自分たちに押し付けられた政治哲学を奉じています。その政治哲学は、巧みな論法に基づく物質主義、党に対する盲従、不安を煽るあらゆる方法、密告者の奨励、右派であれ左派であれ、独裁体制に本質的に内在する定期的な粛清を含んでいます。

ティク・ナット・ハン (Thich Nhat Hanh; 1926年-) は『ベトナム——火の海における蓮』<sup>41</sup>において、ベトナムの実際の状況は、誰も否定できないことですが、万が一にも不幸にも帝国間の変質するならば、いかなる発展途上国の運命をもあらかじめ示すものであるとはつきり述べています。帝国は、イデオロギー的な口実の下に、政治的威信という目的、そこから生じる経済戦争目的の利益を覆い隠すことさえほとんど気にしていません。

ティク・ナット・ハンの結論によれば、中華人民共和国はベトナムに軍隊を保有していないものの、ベトナムで起きていることは、アメリカ合衆国と中華人民共和国との間における戦争であるということです。

どういうことがベトナム戦争における決定要因となるかを予想することは容易ではありません。一流の強国でさえ、民衆の支持に頼ることができなければ、ゲリラたちを打ち負かすことができないことは、明らかであるように思われます。しかし同様に、別の大強国を背後に抱えている場合、ゲリラ戦が大軍隊を持つ好戦的な強国と渡り合うだけのことであることも明らかであるように思われます。

---

<sup>41</sup> *Vietnam: the Lotus in the Sea of Fire*, London, SCM Press, 1967.

すなわち、ベトナム（と同じ運命に苦しむ諸国と）の解放はきわめて相対的なものです。人々が資本主義の勢力圏にある同盟者であるか、それとも、社会主義の勢力圏における同盟者として周囲をぐるぐる回る運命をたどるかのどちらかです。

## 2) ガンジーは失敗者か、それとも預言者か？

もしガンジーを行動的な勇気ある非暴力の指導者の模範とみなすならば、今や「ガンジーよ、あなたの勝利はどこにあるのでしょうか」と問うべき時です。

手短かに言えば、ガンジーは失敗したように思えます。正直なところ、発展途上諸国と先進諸国の両方で彼の教えの見通しはどうなっているのでしょうか。

以下のことが、私たちの意見では、第三世界におけるガンジー流の展望です。真実と解放をもたらす倫理的圧力が武力革命に代わる現実の道であるためには、既成の支配体制は人権、とりわけ表現の自由を最低限度尊重しなければならないということが最も重要であるように思われます。さらに、全体主義的手法、肉体的・精神的拷問が真実を偽るために確立されてはならないのは当然です。

運動の構成員が平和的な実力行使の原則と方法に一致した行動をとって投獄されたならば、自分たちの虐げられた兄弟との団結を表明して刑務所の門に出頭することにも快く応じる数十名、数百名、数千人もの仲間の構成員たちを結集させることが運動の方策の一つであるべきです。こうすれば、大騒ぎが巻き起こされることは疑いなしでしょう。さらに、新聞記事、ラジオ、テレビを通して、また、報道機関各社を通して、運動が全国的にも国際的にも認識されるでしょう。

しかし、発展途上諸国においては、独裁支配は、破壊活動分子または共産主義者による攻撃から社会秩序を守るという口実の下に、容易に管理体制をとります。しかも、報道機関、ラジオ、テレビは、当局政府の意に沿うことだけを伝えますので、解放をもたらす倫理的圧力を反響させることはあえてしないことは見え見えです。

さらに悪いことに、報道機関は、密告の部局から直接、時には公式に伝えられた嘘や諸事実の歪曲を広める義務があると感じます。

密告者たちはそそのかされているのです。精神的・肉体的拷問が「破壊活動」分子またはご同類と思われる人々から自白をもぎ取るという科学的方法として用いられます。罪が証明されるまで推定無罪となるのではなく、罪が推定されるのです。しかも、たとえ被疑者に不利な証拠がまったくなくて、彼に有利な動かぬ証拠があるために釈放されても、犯された誤りに関する隠し立てのない率直な承認は決して得られません。

社会構造転換の予備的条件として良心を駆り立てるために倫理的圧力を実行することはいか

にして可能でしょうか——新聞や雑誌、ラジオやテレビの利用が禁止されても、正式な禁止令がなくとも、国家の安全という名によって極秘ながら事実上の命令によって許されないならば——。会合や集会が公の場で禁止されるならば、また、非公開の会議が演説者と参加者の双方に対する疑念を引き出すならば、解放をもたらす倫理的圧力を実行することはいかにして可能でしょうか。

さらに、独裁支配体制の最も恐るべき武器の一つは、偉大な指導者の命を助け、地位の低い協力者たちを逮捕することです。後者は、複雑で悪意に満ち、危ない審問に立ち向かい得る覚悟が十分にできていないのです。

ガンジーがハンガーストライキに打って出た時、世界全体が心を痛め、いかに影響力があろうとも地球の四隅から生じた倫理的圧力に逆らう帝国は一つも存在しなかったのです。しかし、考えてみましょう。既成の政治体制はガンジーを発言権のないままにしておき、ガンジーの側近で腹心の協力者たちを牢屋に閉じ込めたままでした。既成の政治体制は、(たとえば、仲間のことを密告しているとか、怖気づいて破壊活動への関与を白状した、サティヤグラハ〔非暴力不服従運動〕を放棄した・・・などといった)彼らに関するさわめて劣悪な中傷を広めました。非暴力の使徒は何をすることができたでしょうか。

ビラや声明文に訴えたと考えつくかもしれませんが、それらを配布した者たちは危険な活動家たちとして投獄され、拷問を受けるでしょう。それらを印刷または謄写版で刷った者たちは鞭打たれ、彼らの機械は破壊されるでしょう。

だまされやすい人たちや、まさに事態を察知しかけている人たちの間では、投獄、とりわけ、拷問の噂は、恐れと運動からの逃亡を引き起こすことは目に見えています。聖職者たちを働かせればとでも？ まさか、こういう仕方で行動する司祭たちが信心深い多数派から理解されることはないでしょう。というのは、多数派は、福音伝道から脱線しているとして司祭たちをとがめ、政治に関わっていると彼らを非難することになるからです。

福音を宣教する際、平和の条件として正義を要求する者は誰でも、投獄される危険を冒すものです。もし外国人であれば、国外追放されるでしょう。

聖職者にとって投獄以上にもっと深刻な事態は、自分が投獄されていることではなく、自分の周囲にいる活動家の平信徒たちが皆福音のメッセージに共鳴したにすぎないのに投獄されているのを目にすることです。

こういう情勢においては、とりわけ若者が平和を愛する者たちの実力行動をあきらめて、地下に潜伏し、武力革命の準備をしようとするのは明らかではないでしょうか。

今繰り返し私たちは言わなければなりません。すなわち、一流の強国でさえ、地元民衆の支持がなければゲリラたちを打ち負かすことができないことをベトナムが証明しているのであれば、ベトナムはまた、世界における最も偉大な英雄的行為も、背後に別の支持がない限り一流

の強国に立ち向かうことはできないことをも証明しています。思い違いをしてはなりません。社会主義帝国は、ソビエトにつこうが中国につこうが、資本主義帝国が全体的発達を求める発展途上諸国の希望に対するのとちょうど同じように、冷酷で不合理です。資本主義大国は、自由主義世界のための犠牲を払うこと、民間企業を擁護すること、政府転覆計画や社会的混乱状態から秩序を守ることを支持しながら、実際は自分たちの政治的威信と、そこから生じる経済的利益とを守っているわけです。資本主義帝国は、はっきり言うと、経済力と国際的な企業連合の支配下にあります。社会主義帝国に関する限り、強硬路線を取って妥協せず、多元主義を認めていません。社会主義帝国は、巧みな弁証に基づく物質主義を押し付け、党への黙従を要求し、ちょうど極右のファシスト的独裁体制のように、全体主義的で半永久的に不安定な政府を樹立しています。

ガンジーは何と言うのでしょうか。ガンジーが生まれてから百年後の人類社会のこのような状況に直面して第三世界に何をせよと助言するのでしょうか。

しかし、ガンジーの教えは発展途上諸国においては絶好のチャンスを得ているようですが？ おそらく社会構造の変革が始まらなければならないのは、まさしくそこでしょう。貧しい国々には変革なしには貧困から逃れることは決してないでしょう。さもなければ、人間としての人格に対する尊重も自由の気風も自らの有効性を証明する倫理的行動の余地も決してありません。その有効性とは——単なる改革政策の対象物によって証明することにはではなく、社会の根っこ部分にまで行き届いた迅速な変革を成し遂げることにあります。そういう変革だけで、武力革命に訴えることが不要となることでしょう。

しかし、この場合にもやはり、疑問が起こります。世論に対する諸大学の影響、特に、先進諸国の名門有力諸大学の影響力は相当なものです。今や私たちは、これらの諸大学のまさに中心部においては、学生の抗議行動、本当のことを言いますが、乱暴、虐待、抗議行動に伴うつまらないテロ行為に立ち向かうために、怪しげで危険な反発があるのを目撃している最中です。諸大学は、普遍的な責任がありますが、学問の使命に見合った方法をまだ見出していません。諸大学は自由裁量の権限を求めています。明日にでも新たな独裁者の職が任命されるかもしれないというのに、これは恐るべき実例であり、危険な先例でもあります。これらの諸大学を直接的に公権力と、あるいは、諸大学に助成金を支給する財団の手を経て間接的に経済的権力と結びつける絆は、上述の事態をどの程度説明できるのででしょうか。

社会的伝達手段は、途轍もない力を代表しています。しかも、それはごく最近までこれほどの広がりでは知られていなかったものですが、発展途上諸国においては、国家によって操作される可能性がある利便性を考慮すれば、予想外の弱点を持った巨人です。

資本主義世界の先進諸国においては、マスメディアは、ビジネス、しかも巨大ビジネスにな

り始めています。ジャーナリストたちの自由は今や、たいいていの場合、きわめて相対的なものになりつつあります。自由は、ビジネスの利害が顔を出し始めたところで、終わりとなります。独立した勇気ある新聞が存在する時、イタリアの日刊新聞“*L'Avvenire dell'Italia*”の場合のように、それはつぶされます。

社会主義陣営の諸地域では、社会的な伝達手段は党の独占物に他ならないことを思い起こすだけで十分です。

諸宗教は、資本主義陣営の諸地域では、制度の中に巻き込まれる極めて重大な危険を冒しています。諸宗教は、立派な信条を広めることにおいては勇気がありますが、それを遂行するだけの十分な行動力がありません。それはまさに、自分たち自身が取り込まれていく過程に影響されるという理由——無自覚的なものですが——によるものです。

社会主義陣営の諸地域では、諸宗教は、いかなる仕方であれ社会・経済的な領域に首を突っ込まないことが自分たちに無条件に課せられているので、人間の発達という方向へ向かって、異質で現実から疎外する力に変形されています。

政治指導層、若い経営陣、労働者階級の若い指導層において対話らしきものが何か期待できるでしょうか。国家間の貿易政策の現行の形のどん底状態、発展した世界と発展途上の世界との間における根本的不正義の核心に関わる変革に結びつき得る話から起こりそうな実際上の困難を指摘する必要はありません。

そうすると、私たちは、先進諸国においては、ガンジーの勝ち目や、彼と彼の模範的行動によって触発された種々の運動の勝ち目はないとまでは言えないにしても、あまりにも取るに足らないものであると結論しなくてはならないのでしょうか。

断じてそうではありません！ 時代は、ガンジーを支持する方向に動いています。しばらくすれば、ガンジーは一人の預言者として認識されるでしょう。究極的に言えば、人間は戦争のばかばかしさを確信することでしょう。世界戦争は、核エネルギーの開発以来、明らかな自殺行為です。各地の戦争では——ベトナムがそれについては証明していますが——、まさしく世界戦争と同じように、膨大な数の人間の命が犠牲となりました。

自分からは動かない多数派においても、暴力と憎しみとの釣り合いが安定しないまま互いに衝突する極左と極右においても、どこにおいても、暴力が暴力に対する本当の答えではないこと、すなわち、暴力は暴力に直面すること、世界が暴力の螺旋に陥ることは必定であること、暴力に対する唯一の真の答えは第一の暴力に立ち向かう勇気を持つことであることに十分に気づいている少数派がいます。

特権階級と当局側は、常識があれば、一方で流血を伴う武力使用の暴力行為、他方で平和的な人々の激しさ、すなわち、解放をもたらす倫理的圧力のどちらかを選択することを余儀なく

させられることを受け止めることになるでしょう。

当局側と特権階級が、小さな改革案では満足しようとせず、不当で非人間的な社会構造の明確な変革を要求する平和的な人々の激しさには決して屈服することはないと考える者たちにとっては、自分たちの子たちが正義の側についている場合が非常に多いこと、及び、これらの若者はもっと団結した人間らしい世界を求める要求を支持する力強い代弁者となっていることを思い起こすだけで十分です。

### 3. 「正義と平和を求める行動」

#### 1) 目的と展望

「正義と平和を求める行動」は改めて説明するまでもありません。その行動目的は、その名前の通りに明言すると下記の通りです。

*行動*——単なる思索、理論、議論、瞑想ではないこと。

*正義*——どこにでも不正義が存在すること。どこにでも正義を求める必要があること。

*平和*——正義は平和にふさわしい条件、歩み、道筋であること。真の永続的な平和が達成されるのは正義を通してのみであるということ。

正義に飢え渴く世界中の皆さん、どうぞ、共に行進してください！

不正義に苦しむ*抑圧された者たち*！ 発展途上諸国の者たち！ 豊かな国々における恵まれない階層の者たち！

貧しい国々の特権階級または豊かな国々の裕福な階級に属していながら、もはや不正義を認めず、それが第一の暴力であることを*認識しない者たち*！

先進諸国世界と発展途上諸国世界との間で絶えず拡大しつつある隔たりの重大性を理解するだけの大変立派な地位に就き、生来、また職業上、流血の暴力よりも解放をもたらす倫理的圧力を優先させる*科学技術者たち*！

流血と武器使用の暴力行為を選択したけれども、*平和主義者たちの激しさこそが真の解決策ではないのかと思案し始めている者たち*！

今もなお、あるいは、昨日までは当局側であり、暴力に対して暴力（実際は拷問を行使して）でやり返してきたが、武器使用の暴力行為や憎しみに陥ることなく*正義を要求する平和主義者たちの激しさを今や理解する者たち*！

正義に飢え渴き、一緒に行進して「正義と平和を求める行動」に加わるようにとの招きに答える世界中の者たちは、以下のことを認識していただきたい。

「正義と平和を求める行動」は政治的党派ではなく、そういう意図はまったくないこと。  
 「正義と平和を求める行動」はいかなる点においても、誰かの、どこかの政党の、どこかの国の、どこかの文化の、どこかの宗教の所有物ではないこと。  
 「正義と平和を求める行動」は、正義と愛の道こそが真の平和に通じていることを確信し、解放をもたらす倫理的圧力を加えて正義を獲得し、人類が憎しみと混沌から自由になるように助ける決断をしている善意の者たちの集まりであること。

自分自身の宗教の範囲内においては、各人は、平和の条件としての正義に自らをささげたいという避けがたい衝動を見出すことでしょう。

「正義と平和を求める行動」の展開と並んで、あらゆる宗教の聖典から、平和と正義について語りかける訓戒、教訓、祈禱文を、さらに同じく、いろいろな宗教における偉大な模範の実例を拾い集めることがいつか必要となることでしょう。一部の宗教にとっては、「正義」という語は常にそのような美德を必要条件としており、実際、聖性の同義語です。

平和に関しては、月明かりのよどんだ沼地と同じような見せかけの美しさを備えた偽りの平和の事例もあることが知られています。私たちに語りかけ、私たちを動かし、そのために喜んで人生をささげる平和は、すべての権利、すなわち、神の権利と人間の権利が全面的に尊重されることを前提としています。単に他の多くの者たちの権利を犠牲にした一部の者や一部の特権階級の権利ではなく、各人の、そしてすべての人間たちの権利です。

漠然すぎるでしょうか。あいまいすぎるでしょうか。平和を愛し、平和が正義の実であることを知る神は、善意の人間たちを助けてくれることでしょう。天地創造の始めにおいて神の息が水の表を覆ったのと同じように、神の霊の息吹は地の表を覆うことでしょう。

空漠としているように見えるものがはっきりとしてくることでしょう。あいまいに見えるものが明らかとなることでしょう。そして、指導者がいないように見えるこの運動は、主によって直接導かれることでしょう。

## 2) 障壁を超えて

これだけたくさん種類のこれだけ多くの障壁があるのに、人間同士のこれだけ多くの分裂があるのに、越えがたいこれだけ多くの障害があるのに、世界規模の運動を想像できるでしょうか。

人種、言語、国、宗教の違いによって引き起こされる諸問題を認識する力を失わずに、憎しみ、

争い、冷淡、利己主義を放置するのではなく、どこにでも平和的に、しかし断固として正義を平和の条件として要求する決心をした人々がいると考えるのは、夢でしょうか、または幻想でしょうか。

肌の色、唇または鼻の形が何であれ、背丈がどれだけであれ、人間は人間以下でもなければ、人間以上でもありません。人間なる神の被造物です。頭と心臓がついており、希望や夢があるのです。さらにもっと重要なことは、天地の創造者としての父なる神は、人間に関わり、人間としての充実感をもたらす全計画をお持ちです。

どこかの部族、どこかの家族、どこかの人種に属しているならば、人間という家族にも属しています。自分自身の環境世界で出くわす不正義はどこにでも存在します。

もし自分の人種、自分の国民を特別に愛しているならば、もっと団結した人間らしい世界を建設する決心をしている人々の輪に来て加わって下さい。言語が何であれ、ほとんど無名であれ有名であれ、経済的に遅れていようが金持ちであろうが、私たちは人間を理解することができますでしょう。

表情、笑顔、平和と友情の仕草、心遣いと感情のこまやかさ。これらのものは、想像するよりもずっと私たちが互いに近いことを身をもって示すことのできる普遍的言語です。どこでも親切は人の心に触れ、不正義は人を傷つけ、平和が理想です。

自分の言語を守ってください。その言語の音、抑揚、リズムを愛してください。しかし、自分自身の言語とは遠くかけ離れた異なる言語の人々と一緒に行進するように努めてください。彼らも同じようによりまっとうな人間らしい世界を希求しているのです。

国が何であれ、敵の諸部族のただ中にある小さな一族であれ、権勢を拡大する民族であれ、自分自身の祖国では、「正義と平和を求める行動」の精神を真に保持する者なら誰でも、自分がよそ者みたいに感じることはないでしょう。

なるほど、私たちにはそれぞれの国があります。けれども、神が私たちが生まれさせた国を尊敬し、愛し、同胞と特別のつながりを持ちながらでも、特に、自分が人間たちの中の一人であり、兄弟たちの中の一人であるように感じることは可能です。

こういう論法がお分かりですか。「わかります」と答えてください。しかし、そう答えるあなたは、人間はまったく違った仕方でも事を考え、行動すると思ってください。他の者に「あいつはよそ者だ！」と叫ぶ辺境の地、慣習、障壁、隔たり、利己主義があります。

すべての人間が互いを兄弟として認め合い、愛し合う世界を建設するためにやって来て、力を貸してください。

宗教が何であれ、宗教が人間たちを分断するのではなく結び合わせることに役立つように要

求してください。

宗教間の戦争！ これこそ、あらゆる悲劇を終わらせる悲劇ではないでしょうか！ これは言葉の矛盾であり、ばかばかしいことです。神は愛です。宗教は、人々を結集させ、団結させなければなりません。

信仰の教えにおいては、「正義と平和を求める行動」の基準、命令はどうなっていますか。

人生が宗教実践から、あるいは信仰からさえ、人間を遠く離れたところへ連れていくとしても、それでも人間は真実を愛するかもしれません。おそらく、人間には正義のために苦難を受ける能力があるでしょう。それならば、人間は大いに力となり、難局にある時における模範として役立つことができることでしょう。

種々の障壁を超えて団結しましょう。現在の少数派——つまり、あらゆる人種、言語、国、宗教の内部に少数派が存在します——が「正義と平和を求める行動」のために集まるならば、どんなことがあっても私たちは希望を持つ権利があるつもりです。

### 3) 実際の見地

「正義と平和を求める行動」は、解放をもたらす倫理的圧力が以下のことに役立つように、これを平和的に効果的に行使したいと願っています。

発展途上諸国の社会的・経済的、政治的・文化的構造を変革すること。

発展途上諸国に対して、恵まれない社会層の差別撤廃を図り、発展途上諸国との貿易を支配する国際政策を根本的に修正するように仕向けること。

基本的に肝心な点は証拠書類による裏づけです。「正義と平和を求める行動」は、情報に通じているはずで、その倫理的な説得力は、主張の真剣さ、正確さ、並びに、客観性によって勝ち得られることでしょう。言うまでもなく、議論はいつもありと考えられますが、各個人と組織は、「正義と平和を求める行動」の報告文書、分析、並びに、提案をまじめに受け止めなくてはなりません。

以下は、発展途上諸国に関する基本的裏付けのために提議する意見の一部です。

ラテンアメリカに関しては、「国内の植民地状態」という言い回しが、何百万人もの同胞の貧困に自らの富が基礎づけられている特権階級の人々の集団に言及するために、この大陸では使用されています。

これが次の諸問題を提起しています。

ラテンアメリカにおける国内の植民地状態というこの現象に関する真相はどのようなものなのでしょうか。この想定が正しければ、いかにして裏づけることができるのでしょうか。

アフリカとアジアは同じように国内の植民地状態に苦しんでいるのでしょうか。それともアフリカやアジアの状況はこの点ではまったく違うのでしょうか。

発展途上諸国は、「人間以下の状況」という表現を理解するのが困難です。これを発展途上諸国に痛切に感じさせるためには、全力を注がなければならない論点と最も印象的な状況とはどのようなものなのでしょうか。住宅事情でしょうか。食料の量と質でしょうか。衣類不足でしょうか。基本的な教育制度の欠如でしょうか。労働条件の最低限の保証の欠如でしょうか。見通しや希望の欠如でしょうか。事実上の奴隷状態でしょうか。

さらに、同じような思いが豊かな国々における恵まれない社会階層に向けられています。

最も豊かな国々でさえ「暗い地域」(gray belts)、すなわち、恵まれない社会階層の地域があるというのは本当でしょうか。これはどのように論証できるのでしょうか。

貧しい国々の未発達状態と豊かな国々の未発達状態との実際の違いがあるように思われます。しかしまた、豊かな国々の内部における金持ちと貧乏人との格差が衝撃的であることも事実のようです。こういう事態をどのように観察して、どのように感じるのでしょうか。

先進諸国と発展途上諸国との関係に関する必要な文書による裏づけに関連して、申し上げたい意見いくつかあります。

1968年8月、ジャマイカの首相がカナダを訪問しました。1968年8月12日付のカナダの新聞<sup>42</sup>によると、首相はその時、カナダのトラクターを購入するために彼の国は1966年、砂糖六八〇トン分の金を支払わなければならなかったと述べています。1968年、同じトラクターの値段は、砂糖三千五百トン分でした。下落の一途をたどる主要産物の価格というこの深刻な状況は第三世界の各国の問題に対応する条件に転換させることはどのようにして可能でしょうか。

過去十五年間、ラテンアメリカにおけるアメリカ合衆国からの投資は、八億ドルにまで上昇しました。同じ時期、アメリカ合衆国に送られた投資からの歳入は百十三億ドルにまで跳ね上がりました<sup>43</sup>。

---

<sup>42</sup> 1968年8月12日付“*Le Devoir*”紙。

<sup>43</sup> 1968年10月24日付“*Le Monde*”紙。カナダ非聖職者宣教献身者団体（Oblate Missionaries of Canada, 8844 Est, Notre Dame, Montreal 430）がカナダ政府に提出した「カナダの対ラテンアメリカ外交政策に関する意見書」によって引用。

このような情報は、研究と議論の基礎として不可欠であるのと同時に重要です。それは、国連貿易開発会議（UNCTAD）報告書に存在します。何しろ、ジュネーブやニュー・デリーにおいて発展途上諸国は見事な努力をして、先進諸国世界と発展途上諸国世界との関係には援助が不可欠であるが、十分ではないことを立証しました。

誰かが蛮勇をふるって国家間貿易政策の徹底的修正を手がけるまで、貧しい国々は自らの血でもって豊かな国々の富を供給し続けることになるでしょう<sup>44</sup>。

別の種類の情報は、発展途上諸国と豊かな国々の貧困諸地域の双方における被抑圧階級側自身か若者側かのどちらかの実力行使と関連しています。

過激な行動と武力使用の暴力行為に切り替えたくてたまらない焦燥を私たちはどう理解すべきでしょうか。彼らに加わりたいからというのでもなく——「正義と平和を求める行動」を支持する選択がすでになされています——単なるくだらない好奇心からでもありません。それは、良心にかえりみて、異なった選択をした人々に対する尊敬の念と思い合わせた人間の関心なのです。彼らの選択も同様に、正義という大義のために身を捧げるといえるものです。

「正義と平和を求める行動」は、社会秩序を守るといふ口実の下における当局側のいかなる暴力的対応をも調べると請け合いました。「正義と平和を求める行動」は、拷問が情報を引き出す「科学的」方法として用いられていることが確実にわかるたびに抗議することを特に引き受けています。この情報が国家の安全にとって大きな影響力があり、あるいは、重大性の高いものである場合でさえ、そうです。

こういう情報を誰が突き止めようとしているのでしょうか。誰が、どのようにして、いつ、どこで？「正義と平和を求める行動」の名によって、発言することは許されるのでしょうか。「正義と平和を求める行動」は、どこで動いているのでしょうか。その構成員たちを受け入れ、あるいは、公認する権利を持っているのは誰でしょうか。この運動は認知されているのでしょうか。誰かがこの運動を自己目的のために食べ物にするのを目にする恐れはないのでしょうか。

不信が広く存在するところでは、信頼に基づく運動を創り出すことはできません。私たちは、この原理を出発点としています。「正義と平和を求める行動」を理解し、研究と行動のための学習の場としてこれを採用する能力のある少数派は、どこにでも存在します。これらの少数派

---

<sup>44</sup> 若い人々は、関連する国連貿易開発会議報告を利用できるように努力をすべきです。これらの抜粋は、大英帝国では政府刊行物出版局（Her Majesty's Stationery Office）から、アメリカ合衆国では国連本部書店部から入手できます。詳細は、国連事務局として使用されている国連貿易開発会議の情報部門（パレ・デ・ナシオン、ジュネーブ、スイス）に書面にて問い合わせることを勧めます。

をアブラハム少数派と呼びましょう。私たちは、アブラハムと同様、望みに逆らって望みを抱いているからです。

自分一人だけとお考えでしょうか。周囲を見て下さい。友に話しかけてください。家の中でも近所でも、学校でも職場でも人々に話しかけ、暇な仲間たちと話をするのです。そうすれば、アブラハム少数派がすでに存在していることがわかって驚くことでしょう。つまり、そういうことに気づいていなかったのです。

研究と行動の計画をただちに立ち上げることを勧めます。入手すべき情報の一覧表を繰り返し検討して下さい。それを仕上げるように努めてください。

できれば、アブラハム少数派は、初動の段階を指導し、研究と行動を進行させる力量のある頭脳明晰な経験豊富な誰かがいなくてはなりません。この誰かはすでに存在するのです。この誰かを見つけさえすればよいのです。

自分の町で、自分の地域で、自分の国で他のアブラハム少数派が出現するように奨励してください。アブラハム少数派に連なる者が互い助け合わなければならないのは、言うまでもありません。

以上述べたことが予備的な措置です。しかし結局、きわめて重要できわめて困難な目的を達成したいと願うならば、正義と平和を求める行動はどういうことを実践し、どういう振る舞いをしなければならぬのでしょうか。

アブラハム少数派は、いろいろな種類の接触をする手段を考案しなければなりません。

特権階級の指導者たちが接触の相手である場合、心の底から共感してきわめて過酷な真実を公表できる知識豊富な人格者に働きかけるという条件がつきます。

諸宗派の指導者たちが接触の相手である場合、メデリン（コロンビア）のラテンアメリカ・カトリックとウプサラ（スウェーデン）のプロテスタントは、不正義に関する深刻な結論に到達しています。カトリックとプロテスタントの双方が世界的規模の正義に関する偉大なベイルート文書に共同署名しました。

他宗教にも同様の動きがあるに違いありません。各宗教が、現代世界の見捨てられた者たちの人間らしい発展を奨励し、富裕層の良心を喚起する可能性のある真理を自らの聖典の中に再発見しなければならない時が到来しました。

国連貿易開発会議報告書の徹底的な検証を諸大学に何とかさせることのできそうな者は誰でしょうか。報告に何ら価値がなければ、ずたずたに引きちぎればよいのです。報告が真実であ

れば、地球規模の不正義を弾劾しているのです、とんでもないほど深刻な内容です。

資本主義帝国にも社会主義帝国にも依存しない新しい経済発展モデルを諸大学に何とか見つけ出させることのできそうな者は誰でしょうか。おそらく、解決への道は、人類全体とすべての人間たちの発展を真に確保する社会主義化の過程を経ることです・・・。

先進諸国の諸大学、第三世界の諸問題を専門とする研究調査機関に期待を寄せるのは正しいでしょうか。

新聞、ラジオ、テレビは特に注目に値します。経済大国は、こういう方面ではその影響力を強く感じさせています。新聞社、雑誌社、ラジオ・テレビ放送会社、あるいは、通信社で働く記者たちの中におけるアブラハム少数派がどう見てもきわめて特別な意味を持ち、彼らの影響力が尋常ではないことは周知のことです。

軍部側と対話を試みればいいではないですか。そういうことになると、ヘルメットに潜んでいるのは、一人の人間です。人間性を備えた兄弟です。さらに、軍隊内部には目覚めさせられ、励まされ、「正義と平和を求める行動」に呼び集められるべきアブラハム少数派が存在することは明らかです。

それでは政治家たちとの対話はどうなのでしょう。鳩のような素直さと蛇のような賢さでもって彼らに接近するように努めるべきです・・・。

時には、一定の間、国の状態が行動の最低限の可能性も提供しない場合もあります。そういう時には、学習し、苦しみ、じっと待つのです。そうすると、自由が絶えず存在する国々の責任はどんどん大きくなっていきます。

国際的次元では、「正義と平和を求める行動」の希望を呼び覚ます組織は種々存在します。キリスト教徒側には今、*教皇庁正義と平和委員会* (Pontifical Commission for Justice and Peace) と「世界教会協議会」(World Council of Churches) があります。両者とも、正義の道を切り開き、平和を獲得することに本気で関わっています。これに類似する動きは他の諸宗教にあるでしょうか。

世界の偉大な諸宗教が平和の条件としての正義を要求することに自らの倫理的説得力のすべてをささげる決心をするのは、いつの日のことでしょうか。

たとえば、国連教育科学文化機関 (UNESCO) のような組織が、もっとまっとうな人間らしい世界を建設するために、なくてはならない独立性、倫理的な説得力、北半球の先進工業諸国と南半球の発展途上諸国、資本主義諸国と社会主義諸国の各諸大学を結束させるだけの関心

を持つのは、いつの日のことでしょうか。

先進諸国が、自国の社会構造の変革なしには発展途上諸国における社会構造の変革は不可能であることを理解するようになることが、決定的に重要です。

これらの提言が曖昧で雲をつかむようなものであれば、少し調査を行い、想像力を働かせてください。われわれは、実際的な行動の方法をいくつか提示しました。それは、今日と明日のアブラハム少数派が、平和の条件として正義と愛の道に常に忠実に、さらに前進をし、発言をし、とりわけ、あとのことをすべて引き受けてするためです。

#### 4) 全世界に関わる運動

あらゆる希望に逆らって希望を抱き、アブラハム少数派が五大陸と七つの海で増加することを思い描きましょう。それなら、誰に話しかけるのでしょうか。誰に頼るのでしょうか。誰に相談するのでしょうか。あらゆる犠牲を払って、「正義と平和を求める行動」は、何か特定の国、特定の言語、特定の宗教に縛られているという誤った観念は避けられねばなりません。アブラハム少数派は、いかなる権威に対しても送付すべき収支計算書を持っていません。

しかし、人によっては、自分で事態を見極め、情報センター、交流センターなど判断基準となるものを持っておくと最初はやりやすく、あるいは必要不可欠と言っているほどであることは簡単にわかります。

創造力、経験、提案を出し合う試みとして、可能であれば、どこでもいから、住所がわかっているアブラハム少数派に回状を定期的を送付していただきましょう。

「正義と平和を求める行動」の倫理的説得力は、異なる町々、異なる国々、異なる大陸からのアブラハム少数派の間における通信から生まれるものです。

第三世界のアブラハム少数派が本当に連帯の中にいると感じる時、とりわけ、先進諸国から自分たちのところに届く兄弟としての共感の声に触れた時、人類は平和へと一歩前進するでしょう。

御霊は、思いのまま息吹を放ちます。アブラハム少数派が北半球の先進工業諸国と南半球の発展途上諸国、東側陣営と西側陣営に出現することは、まったくありうることです。全体主義的政治体制下でさえ、「正義と平和を求める行動」の理念は栄えるでしょう。

「正義と平和を求める行動」の内部では、多元主義は可能でしょうか。可能であるばかりか、それは望ましいことです。この運動の真髄に守られ、その名によって特徴づけられるならば、

その掲げる理想は一致ですが、それは一様性ではなく多様性における一致です。

この運動は、フランスの場合と同じ形態をブラジルで取るならば、アメリカ合衆国の場合と同じ形態をインド諸国で取るならば、オーストラリアの場合と同じ形態をカメルーンで取るならば、深い生命力はないでしょう。

各人種、各言語、各宗教はそれぞれ自身の特徴をこの運動に残さなければなりません。対立の余地はあるのでしょうか。それは言うまでもないことです。もし「正義と平和を求める行動」が矛盾の表れとして創設されないのであれば、もし「正義と平和を求める行動」が動揺を引き起こさないのであれば、もし「正義と平和を求める行動」が疑念を植え付けないのであれば、もし「正義と平和を求める行動」が立派な献身を喚起せずに憎しみを引き起こすのであれば、自らの甲いの準備をしていることになります。

「正義と平和を求める行動」は、唯一の解決策であると自ら主張しているではありません。「正義と平和を求める行動」は、私たちが皆「出口」を探し求めている時に人間たちを助けたいと願っているのです。

それから、言語に関してはどうでしょうか。通信するための正式の言語が何でしょうか。どの言語も通信するための言語であると私は申し上げます。理解の手助けをしてくれる者が必ずいるものです。そして、心があれば、あとは見当がつきます。大切なことは、始めることです。時が迫っています。私たちは何百年も遅れています。私たちは、不作為の罪に対する直接の責任を負っています。

##### 5) 若者に対する訴え

若い諸君、わが友たちよ、わが兄弟たちよ！

ひょっとして私は間違いをしでかしているかもしれません。あるいは、幻想の下でもがいているのかもしれません。それでも、私は今日の若者に魅力を感じ続けています。よりまっとうな人間らしい世界に対する私の希望の多くは、若者にその起源があり、支えがあります。

私は、英国のマンチェスターでの演説<sup>45</sup>の際と同じように、イングランドにおいて若者はもはや現代世界の七つの大罪——人種差別主義、植民地主義、戦争、家族主義的統治、宗教的形式主義、疎外、恐怖——を許容していないと思いつけています。

諸君には想像できませんが、今日の若者に関する恐怖の話を伝えている手紙を私は非常にたくさんもらっています。諸君が戦っている上述の七つの大罪とは対照的に、これらの手紙は、そこへと陥っていると言われる七つの大罪——俗物根性、精神的怠惰、抗議行動、ドラッグ、

<sup>45</sup> 1969年4月の英国学生キリスト教運動大会における演説「危機への応答」。

セックス、妥協、無神論——を強調しています。

手紙で話題にされている俗物根性は、服装、音楽、言葉遣い、態度に起因するものです。古い家族のアルバムに目を通せばそれで十分ですが・・・どの世代もそれ自身の流儀があることを人々が忘れているのです。

精神的怠惰とはどのようなものでしょうか。時代遅れで、生活から遠くかけ離れた、土ぼこりのように干からびた授業を受けてはなりません。しかし、大学はそれを諸君に教え込もうとしています。大人たちが諸君を相手に、私たちの時代の現実の恐ろしい諸問題について議論をひとつやってみるべきです・・・。

偏見の殻を打ち破り、非人間的な反進歩主義的な社会構造を壊さなければならないのに、なぜ諸君は異議申し立てをできないのでしょうか。諸君の抗議行動が行き過ぎる場合が多々あること、そういう行動をとって学校に侵入し、占拠し、時には略奪行為を働くことは確かです。残念なことです。諸大学——心理学者たち、社会学者たち、教育者たちがいっぱいいます——は、諸君の反乱が起こりつつあったのにそれを予測できないという無能ぶりを自ら証明し、しかも、何とか諸君との対話に乗り出そうともしていません。問題解決は理解と愛を要求しているにもかかわらず、力に訴えることしかわからない者も一部います。緊急事態宣言のような特別の権限を求め、あるいは、受け入れて、大学側は、政府側に望ましくない恐ろしい教訓を提供します。政府側はすでに法律上も事実上も独裁制に過度に傾いています。

ドラッグと麻薬に関してはどうでしょうか。若い諸君！間違いなく、君たち自身は、ドラッグが偽りの希望であり、その払う犠牲は健康、活力、創造力という観点から見ると、あまりにも大きいことをすでに納得済みです。間違いなく、諸君自身は、同僚たちや友人たちや兄弟たちをこの悲劇的な罠から救い出そうとすでにお考えです。この罠は、金で動く卑劣な雇人たちや、悪を商品化する専門家たちが人の人生をつぶしてでも仕掛けたものです。しかし、残念ながら、こういう仕方現実逃避するように若者を駆り立てる絶望と苦しみの根底に何があるのかについて自らに問うことをしていません。利己主義、思慮のなさ、心の閉鎖性がおそらくドラッグの席卷に直結しているかもしれないと考える理解能力が、若者批判をする人々には往々にしてありません。

セックスが強烈な魅力を発散しなかったのは、どれくらいの期間でしょうか。確かに、実に素朴で、本心を偽らず、あからさまな諸君自身は、愛の神秘を探求する必要を感じています。セックスに関連する場合も非常に多くありますが、それは決して肉体の要求に帰されるものではありません。制約のない愛について語りすぎています。しかし、実際に愛とは何なのでしょう。しかも、自由について語るができるというのに。

妥協とはどういうことでしょうか。これは現実にある危険です。諸君の周囲の至る所で妥協が広がり、心を引きつけていますが、程度の如何によって、着手すべき戦いはより厳しいもの

となります。しかも、妥協は、今すぐにでも誘惑するサイレンのようなものです。

宗教と神に関する諸君の立場は大部分、いのちに対する姿勢と感動にかかっています。民衆の阿片、異質で現実から疎外する力であろうとしない宗教を行動基準として生きようとしている人々に出会う時、また、自分にとって神の愛が人間の愛に関係している人々に出会う時、無神論は、尊敬、共感——ひょっとすると——信仰に屈することになるでしょう。

さて、諸君が私と意見が食い違い、私を空想家で馬鹿者であるとお考えでも、私たちが皆世界を共有していると私は認識しているからこそ、諸君に対して問うています。

諸君は私の訴えを聞いてくれました。今大切なことは、種々の見解と一致することではなく、それらについて話し合うことです。諸君に誠実さを求める必要は、私にはまったくありません(諸君は、偽善と嘘が大嫌いです)。事実に対しては事実でもって異議申し立てを行い、論理に対して論理でもって異議申し立てを行うように諸君をお願いします。新しい観点と新しいもの見方をもたらしてくれるように諸君をお願いします。

諸君を知っていると私が自分で思っているだけではなく、私が実際に諸君を知っている限りでは、私たちは、不正義で呻き苦しんでいるこの世界に対する見方で一致しています。しかも、不正義は諸君にとって第一の暴力です。

一般に若者が忍耐力を失い、過激な行動と武器による暴力にいつのまにか入り込んでいると認識していただきたいのです。

諸君はまた、いろいろな政府がいつでも野蛮な仕方でも逆襲する態勢にある事実も認めています。しかも、それらの政府は、拷問ということになると、良心の咎めは一切ありません。諸君の疑念、いや諸君の中の多くが抱く疑念は、以下の点に関係しています。すなわち、たとえ「正義と平和を求める行動」のような前向きで厳しい運動の場合でさえ、非暴力は実行可能でしょうか。

何が私たちを分断するのでしょうか。私たちは、目指す目的で団結しています。私たちは、もっとまっとうな人間らしい世界を願い求めているのです。武力使用の暴力行為だけが、奴隷状態の人々を創り出す非人間的な社会構造を震撼させ、打破する力があると諸君はひょっとして思っているかもしれません。

正義を要求することによって私の人生、私の力、私の活力の残りを楽しく、しかし、憎しみもなく武力使用の暴力行為もなく、解放をもたらす倫理的圧力を通して、真実と愛を通して精力を費やすのは、愛だけが建設的であり、強いことを私が納得しているからです。

私は、諸君の誠実さを知っています。私は、諸君の選択を尊重します。諸君の周りのいかなる者をも無関心なままにしておいてはなりません。議論を巻き起こしてください。諸君の真実

により、人々は、考えた上で一つの立場を取ることをせざるを得なくなるのです。真実のように心地よくない空気を醸し出して下さい。正義のように厳しい要求を掲げて下さい。

「正義と平和を求める行動」に力を下さい。「正義と平和を求める行動」を支援して下さい。「正義と平和を求める行動」に問題提起をし、それを話題にして下さい。自分の権利を主張し、行動することができる機会を与えて、アブラハム少数派を助けて下さい。

以上が私の訴えです。私に諸君の暖かさや友情を！ 諸君と共にいると、私はどうしても、気持ちでは若いままで、すべての人々、兄弟たちを助けるために必要な希望と愛を持ち続けなくてはならないのです。

## 資料2

## 守るすべのない者たちを守る

ポール・J・ヒル (1954-2003年)

私は、中絶診療所に通じる出入り口の真ん中に立つことは通常しなかった。しかし、この日は違っていた。私は、ジョン・ブリトンがその日——絶えず繰り返し——いかなる子供たちも殺すことのないように、自分の力で何でもやる覚悟を決めていた。中絶医の後ろで診療所の扉が閉まって鍵がかからないようにしてやろう——（以前と同様）三十名以上に及ぶ赤ん坊たちの体をバラバラにした彼に注意信号を送るということ——と決心していた。

この「守る行動」を起こすことを私が最初に思いついたのは、八日前の1994年7月21日であった。私は、車の販売店や中古車の敷地で車の修理業を営んでいた。私は、午後、車の敷地で仕事をしながら、次はだれが行動を起こし、自ら行動を起こしてみようという考えがいつひらめくのかと思いつめがらしていた。そして、その考えが強烈に思い浮かんだ。それからの2～3時間、私はうわのそらで仕事を続けながら、万が一中絶医を射殺するようなことになれば、どういう事態になるだろうかと考え始めた。以前、1993年3月10日、ペンサコラで中絶医を射殺した男、ミカエル・グリフィンに見切りをつけたのは、中絶医射殺について彼が述べたことが彼の行動と矛盾していたからである。しかし、私は、生まれざる者たちを守るという自分の信念を行動に移したかった。

神はありがたいことに、私が十七歳の時に私の誇りと反逆心を作り変えてくれた。成績は良くなかったが、私は1984年、神学校を何とか卒業した。その時、主は、アメリカ長老派教会と正統長老派教会の両方において牧師として務めるための門戸を私のために開いて下さった。七年間にわたる、どちらかという、実りのない牧師職を務めた後、私が両教派から離れたのは、両教派が幼児洗礼を施しているながら聖餐を認めていないのが首尾一貫としていないと確信するようになったからである（うまくいかない説教者としての人生を続けたいという願いもだんだん薄れてかけていたので、こういう姿勢をとることがかなり容易であった）。私は当時、自分自身の事業を始め、家族をペンサコラに引越させ、幼児洗礼と幼児聖餐の両方を執行しているある改革派系の長老派教会に加わった。

神の奇すしき摂理により、私は、ミカエル・グリフィンが中絶医デイヴィッド・ガンを射殺する数か月前、ペンサコラ女性センター（中絶クリニック）における中絶反対活動に従事し出した（私は、ガン医師のことは彼が死ぬ前から知っており、彼が診療所に入っていくのを目撃していた）。ミカエル・グリフィンがガン医師を射殺した二日後、私は、『フィル・ドナヒュー・

ショー』に電話をかけ、殺害を支持すると語った。三日後、私は、その中絶医の息子と共に番組に出演し、ガン医師の殺害をナチ強制収容所の「医師」の殺害にたとえた。それから私は主の導きにより、「命を守る奉仕の擁護者団（Advocates for Life Ministries）」（オレゴン州ポートランド）と接触した。この団体はありがたいことに、同団体の刊行物『命の擁護者』（*Life Advocate*）に寄稿した私の記事を掲載し、グリフィンの行動を正当と認める「防衛行動」声明文にいろいろな活動家たちが署名するために必要な渡りをつけてくれた。この後、またもや一連の奇すしき摂理により、私は米国放送会社の報道番組（*Nightline*）に出演し、1993年8月、カンザス州ウイチタでシェリー・シャノンが中絶医に向けて銃を発射したことの正当性を理由づけた。

### 命のために戦う

『ナイトライン』の放送中、私は、（殺人のみならず、殺人を防ぐために必要な手段を要求している）第六戒を根拠にして、中絶医に対する銃撃を弁護した。殺人行為をやめるだけでは十分ではない。罪を犯していない人間もまた守られなければならないのである。

大多数の人々は、大量殺人が起きているのに、合法的な中絶が介入を禁止することによって不作為の罪を求めていることがわかっていない。中絶を合法化することにより、政府は、自分自身の親族や隣人を血なまぐさい死から守る権利を人々から奪ってしまっている。それはあたかも、ある機関銃手が、合同墓地の前で縛られ、ごちゃごちゃに集められている貧農たちに狙いを定めているのに、彼を制止することを禁じられているかのようである。それと全く同じ仕方で、中絶医のメスがまだ生まれていない者の喉に押し付けられているのに、彼を制止することが禁じられている。それはあたかも、警察が動かないように銃を向け、無理やり殺害——ひょっとして自分自身の子か孫の殺害かもしれない——に身をゆだねさせようとしているかのようである。

聖書の教えによれば、政府側が国民から罪を求めている場合、「人間よりも神に従わなければならない」（『使徒言行録』5章29節）。いかなる人間の政府も、十戒の各戒めを守らなければならない個人の義務を取り除いてはならない。これらの義務は奪うことができないものなのである。したがって、政府が——第六戒によって要求されているように——国民の子供たちを守ろうとしない場合、この義務は必然的に国民に帰属する。自分自身または隣人の子供を守る前に政府側の許可は必要ではない。国民の子供たちは、政府によってどうしても守られないことがないのであれば、国民の手で守られなければならない。さもなければ、子供たちが守られることは決してあるまい。

そこで、仲間の市民たちや政府にこの義務をわかってほしいのであれば、それを主張しなければならない。許せないのは、まだ生まれていない者たちを守るために必要な手段を行使して

いるのが一部の者たちであるということではない。大多数の国民がこの義務を自分とは関係ないと言っているから、政府が国民のためにこの義務を実行しようとしないうことが許せないのである。

名指してミカエル・グリフィン——彼はどう見ても殺人を防いだのであるが——を非難し、殺人で告発する者たち自身は殺人承諾で有罪となってもいいのに。グリフィンをやりすぎだと非難するのではなく、十分なことをしていないということで自分自身を責めることは考えられるのか。殺人者を殺すのと同じくらい不快なことであるが、一人や二人ではなく何百、何千というまだ生まれていない子供たちを殺人者に殺させておくことは、はるかにもっとおぞましいことではないのか。

### 目覚ましい成果

最初に『フィル・ドナヒュー・ショー』に出演した際、私は、グリフィンによるガン医師の殺害は正しかったとする立場を取ったが、それが賢明であったかどうかについての判断は差し控えて欲しいと視聴者に求めた。しかしながら、後で実感したことであるが、まだ生まれない者たちを守るために必要な実力行使は中絶反対運動に信用、緊急性、並びに、方向性を与えた。中絶運動にはこれらのものが欠けていた。運動が広がるためにはこれらのものが必要なのである。

中絶を阻止するための実力行使は神が歴史を通して同様の極悪非道を阻止するために用いたのと同じ手法であると私は実感したのである。たとえば、『エステル記』では、ペルシア王アハシュエロスが紀元前473年、ペルシア人たちによる隣国のユダヤ人殺害を認める法令を制定した。しかし、ユダヤ人たちはおとなしく屈服することはしなかった。自分たちの防衛力の行使により、大規模の災難は阻止された（この場合、支配者側もユダヤ人たちが自らを防衛することを認めたが、彼らの防衛の倫理は人間の側の承認には依存していなかった）。それと全く同様に、中絶がわが国で最初に合法化された際、国民が必要な手段でこの極悪非道に抵抗していたならば、何百万人の子供たちを血なまぐさい死から救済したであろう。こういうわけで、神がご自分の戒めを守るために定めた手段を用いることは無分別でもなければ、靈性を欠いたことでもないのである。むしろ、こうした手段をおろそかにし、それとは無関係に神をあてにすることはおこがましいのである。

私がペンサコラの別の中絶医を射殺すればいろいろな多くのことが達成されると私は分かったのである。射殺は、生まれている子供たちと生まれていない子供たちを守るという中絶反対派のレトリックを実行に移すことになる。射殺は、まだ生まれていない者たちの完全な人間性を証することになる。そういうことができるやり方は他にあまりないであろう。射殺はまた——まだ生まれていない者たちのためだけではなく、中絶を是認する政府、並びに、中絶に抵抗

することを求められている人々のためにも——、中絶の途轍もない影響に国民の目を見開かせることになる。射殺は、何百万の人々に彼らの過去の怠慢を悟らせ、多くの人々を将来の服従へと駆り立てることになる。射殺はまた、中絶支持派を弁護する側に立って戦いに参加するか、あるいは、まだ生まれていない者たちを守る側に立って戦いに参加するかを国民が決定するために役立つことになる。

しかし、最も重要なことに、射殺はまさにサタンの目下の攻撃（中絶医のメス）の時に福音の原理を支持することになると私は分かったのである。大部分のキリスト教徒たちは生まれた子供たちを力づくで守る義務を断固として公言しているが（このことについては、政府はまだ異議を唱えていない）、それに対して、このごろの教授連中は、まだ生まれていない者たちを同じ仕方でする義務をおろそかにしてきた。連中は皆、敵が突破している地点以外の戦線沿いに安住している。この地点で自分なりの立場を取れば、他の者らが私に加わり、主が最終的に大勝利をもたらすと私は確信した。

このような考えが心の中を駆け巡り、私はあの木曜日の午後、自分の仕事を終え、家まで車を走らせた。この問題にいかに取り組もうとも、当時こうしたことについて考え巡らしたことは具体化していなかったが、万事が驚くべき仕方であらわれていくように思えた。もっと考えた後であれば中絶医の射殺を妥当ではなさそうだと思ってもみたくなりながら、射殺をひそかに検討し続けたのである。

### 好機の窓

翌朝の金曜日、いつもの通り、私は中絶クリニックに行った。私は、母親たちの多くが来始める時間帯の八時ごろに到着した。私がかたい、そこでは一番乗りの抗議者であったが、その日は別の活動家が最初に来ていた。さらにいつもと違っていたのは、中絶医が到着した七時半ごろには彼がそこに来ていたということである。控えめに尋ねて、私はそのことを知った。さらに重要なことに、その中絶医が警備にあたる警察より数分前に到着したことを私は知った。こういう情報は、私に進めの合図をする明るい青信号のようであった。

何か月間も、私の妻は、子供たちを私の両親を訪ねる旅行に、息子を夏季キャンプに連れていく計画を立てていた。彼女は、あの来るべき水曜日の朝に出発し、翌週に戻るつもりであった。彼女が出発した日はその後ずっと、それから木曜日は一日中、金曜日に実行する準備にあてた。最初に射殺を思いついてからわずか八日後のことである。私は、妻が出発するまでの数日間、私の意図を彼女に隠しさえすればよかった。妻の計画された旅行の間に実行しなければ（長期間、自分の感情を妻に隠し通すことはできなかったであろう）、彼女はほぼ間違いなく後で疑念を持ち始め、彼女を連座させるのではないかと恐れて私の計画は無駄になったであろう。私は、すぐ目の前の機会にまさる好機は望めなかった。神は、好機の窓を開き、そこから

踏み出すよう私を任命されたように思えたのである。

### 神の約束を思い起こす

私が行動を起こすことを検討し始めてからの二日目の土曜日、私たちは家族で浜辺に出かけた。妻カレンと私は、あまり暑くなかった午後の浜辺を満喫した。三人の子供たちは、この遠出に大喜びであった。息子は九歳、二人の娘は六歳と三歳であった。私たちは砂浜で穴を掘り、濡れた砂浜に沿って歩いた。その間ずっと、私は心の中で自分の計画を熟考して怪しまれないように注意を払った。

このことは、私をほとんど打ちのめすような胸を引き裂く体験となった。もう二度とこのような浜辺に家族を連れていくことはあるまいと私は思ったのである。私は——美しい妻と子供たちから引き離されて——、獄中にいるであろう。彼らが浜辺沿いに歩いている光景は非常に楽しく平和であるが、それとは対照的に彼らから連れ去られることを思うと、ぎょっとした。感情の波が——目に涙を催させようとして——私をどっと襲った。

私は自分の感情を表に出すわけにはいかなかった。自制心を保つために、私は、賛美と信仰をもって、自分の心を主へと高く上げた。私は、胸の中で増大する痛みに対して賛美で対応している限り、それを克服し、物事を依然としてはっきり観察することができたのである——それは何と驚くほど麗しい光景であることか！——。どういうわけか、痛みに対して強烈な賛美で対応すれば、痛みが喜び——浜辺の砂や空と同じくらいにさわやかで明るい喜び——に変わった。私は自分の心と目を高く上げた時、アブラハムを祝福し、天の星のように多い子孫をアブラハムに与えるという神の約束を思い起こした。私はその約束を自分自身のものであるとして誇り、目が涙で曇らないように、目が私の本心を出さないように、力の限り喜んだのである。

子どもたちと遊んでいる時には、親としての本能が湧いてきた。子供たちは、父親の思いやりを楽しんだ。私は一人ずつ順番に連れて行き、頭の上まで海に浸かせると、子供たちは私の首にしがみついたのであった。それはあたかも、アブラハムがわが子を捧げたように、子供たちを神に捧げているかのようであった。

私は妻の美しさとやさしさにも敬服した。私が投獄されても、妻は神の恵みにより、それにうまく対処できることは、私には分かっていた。しかし、妻から引き離されることを思うと——私たちのつながりは続くことは分かっている——魂が苦しんだ。

ほぼ確実に私は大切な家族から連れ去られるが、神がどうにかして万事をうまく運んでくれることが私には分かっていた。家族を失うのではなく、引き離されているだけであればいいと私は願う。別れは辛くても、報いは大きいであろう。あまりにも大きくて、その報いは計り知れない。それはただ信仰によって受け止められた。

### 苦渋の決断

太陽が沈むころには、浜辺で体験した私の感情は薄らいでいた。私たちは、荷物から砂を払いのけて、歩いて車に戻った。カレンも子供たちも何も気づいていないように見受けられた。最後の晚餐を味わう男のように、私は、彼らには知られずに目で彼らの様子を見て楽しんだのである。しかし、私は、来るべき月曜日まで行動に踏み切るかどうかの最終判断をしないでおくことにした。気持ちを固めた時、中絶手術が行われる金曜日に決行する準備をするまで四日間の時間があつた。

それは苦渋の決断であつた。私は、わが家、子供たち、妻を捨てることになる。しかし、神の元に帰ることができるように、神は私の持っているものをすべて与えて下さったのだと感じた。私はまた、この賜物が持っている影響力や価値を気に留めていないわけではなかつた。私はまた神の言葉によって、神が私の子供たちにとって父であり、私の妻を支えてくださることを確信していた。

私はこの目的のためにペンサコラに移り住んだわけではなかつた。また、『フィル・ドナヒュー・ショー』や『ナイトライン』に出演し、自分自身の力でそれらの番組を乗り切つたわけでもなかつた。私は、ミカエル・グリフィンによるガン医師射殺とか、大騒ぎとなつた1984年クリスマスにおけるペンサコラの中絶クリニック爆破とは全く関係がなかつた。私は自分自身の理念ではなく、神の真理——歴史を通して、大量殺人と同類の残虐行為を阻止したのと同じ真理——を掲げていた。神の道の邪魔をする私は一体何者であつたのか。神は今や、その扉を開いたままにし、服従に対する大きな祝福を約束して下さつた。私は神の道を歩む運命にはなかつたのか。

月曜日になってから、私は決心がついたことを悟つた。行動すべきかどうかを心の中で論じることから、一般的な言い方をすれば、特定の行動を計画することへと転換した時、私は、少しほつとしたのである。『ローマの信徒への手紙』14章23節には、「何であれ、信仰によらないものは罪である…」と記されている。もしその時に私が行動しなかつた場合、それは、まったくの不服従という途轍もない罪となつたであろう。射殺後に私が当初妻に語つたことの一つは、「他に選択肢はなかつた」ということである。私の魂の奥底からそういう叫びが出てきたのである。あの特定の時に啓示された神の意志に従うように神が私を召し出したと私は確信したのであり、今もそう確信している。

私の計画は、丸めたボール紙のポスターの抗議看板を携行し、止めてあつた私のトラックから中絶クリニックへ散弾銃を持って行くことであつた。私は、中絶医が私のそばを通り過ぎてクリニックの駐車場に入っていくまで、散弾銃を地べたに置いて見えないようにした。

### 殺す準備を進める

注意深い計画にもかかわらず、射殺の朝は気持ちが落ち着かなかった。就寝したのは遅かったが、頑張って午前四時に起床してから祈りを捧げ、聖書を読んで時間を過ごし、実力行使に踏み切ると固く決意したその日のための準備をしていた。しかし、いつもの生氣と、私があてにしていた熱い思いがなくなっていた。私の肉体の下半身は痛烈な空虚感にとらわれた。これは、のんびり構えていられない任務であったのである。

クリニックまで車を運転しながら、最初はそばを通り過ぎ、万事がいつものとおりであるかを調べることにした（誰かが気づいて、警察に通報したかもしれない気がかりであったのである）。ちょうどクリニックに近づくにつれて、警察の巡回パトカーが私のそばを通り、反対方向に向かった。道を下って行きながら、私は恐怖感をぐっとこらえた。四分の一マイルほど運転した後、戻らねばならない時間が来た。しかし、トラックは向きを変える必要はなかった。トラックは無理にでも進むしかなかった。出入り自由の駐車場で急に曲がると、向きを変えるのは大変で、車台がきしむような音がした。何とか向きを変えようとしたが、進めないと分かった。服従こそが唯一の選択肢であったのである。

### 中絶医を待ち伏せする

射殺の日に先立つ数か月間、『*Gentlemen's Quarterly*』は、中絶に反対する抗議者たちと、中絶クリニックにしばしば出入りする中絶医を含む中絶支持派の人々の両者取材していた。(1994年2月発行)『*GQ*』は、中絶医に向けて発した威嚇、及び、私のように、何者かが中絶医をクリニックに入ろうとする時に射殺する可能性を論じていた。

その雑誌の記事を読んで、中絶医と彼の護衛がクリニックに入る際に用心していることを私は知った。中絶医をクリニックまで車に乗せて引き返す護衛ジム・バレットは、十分に武装していると見なされていた。威嚇を感じたら、彼は「・・・真っ先に発砲し」、「・・・見逃がさない」と述べたと伝えられていた。あいにく、彼は、神の摂理により、その日殺された運転手となったのである。

この試練を経験しながら、二つの思いが私を支え、私を駆り立てていった。最初の思いは、もし私が介入して中絶医クリニックに入るのを阻止しなければ、彼はその日に何十人もの子供たちを殺すことになったであろうということである。次の思いは、もっと重きをなす思いである。それは、中絶医の殺害に成功せず、負傷させただけならば、彼は恐らく、まだ生まれない者たちを殺す働きにできるだけ早く復帰するであろうということである。これからの何か月間と何年かの間に、彼は、利用できる限りの警察の保護の安全の下に、まだ生まれない何千という子供たちを殺害する可能性がある。私は、こういう事態となることを阻止する決心をしたのである。

立ちながら中絶医の到着を待っているのと同時進行で、私は、心の決意を維持するために熱い祈りの中で葛藤していた。最後に、私は、予想された彼の到着の瞬間が近づくとつれて、警察の警備が先に到着しないように一生懸命祈っていた。私は依然として、中絶医を射殺しようとする勇気があるのが分かった。しかし、警官が守っている殺人者の息の根を止めるために警官を殺すことは正当化されるとわかっていても、そうしなければならないという気にはならなかった。私は、可能ならば、私にも警官にも、そういう目に遭わせないように主に本気で直々に求めた。

神は私の祈りに応えて下さり、中絶医が警官よりも2~3分先に到着したのである。私が散弾銃を上に向けた時、二人の男が駐車してあったトラックの前方座席に座っていた。警備のジム・バレットは直接、私と中絶医との中間にいた。私は射殺を終えてから、散弾銃を足元に置き、両脇に手を広げて歩いて行き、逮捕されるのを待った（警察が到着した時に誰かを威嚇している様子を見せたくなかったからである）。

#### 逮捕されたが、うまくやり遂げる

数分内に警察が到着した。私は、警官に向かって、明るい、抵抗しない表情を見せ、彼は銃を抜いて逮捕すると私に命じた。私は手錠をかけられてほっとした。私は撃たれたくなかったので、警察に留置されて満足であった。

私が後で警察の車に連行された時、一握りの人々が集まっていた。私は自発的に声を上げた。「一つのことがはっきりしている。それは、今日、あのクリニックで罪のない人間が殺されることはないということだ」。中絶医が約三十名の人間を殺すことが阻止されただけでなく、彼もまた——ただ負傷しただけで、「仕事」に復帰した他の中絶医たちとは違って——、殺し続けることを阻止されたのである。あの日に関する目覚ましいことは、生き残っていつかは仕事をするようになる子供たちとは違って、彼らを殺すつもりであった者が殺すことをしなかったということである。

警察署では、特別に呼ばれた私服警察官が2~3時間にわたって、私と話をした。彼は、ミカエル・グリフィンとも同じように話をした人である。しかし、私は、起きたばかりのことを話題にしなかった。私は、（国の法律を支持すると誓ったほとんどすべての人々のように）大量殺人を支持すると誓って罪を犯した人々を助ける気にはならなかった。

その後、逮捕係の警察官は、警察署から私を連れ出し、報道関係者やカメラマンの一団の前にある彼のパトロールカーまで二十ヤード付き添った。署の玄関から外に出るとすぐに、私は主導権を握って、用意周到の声明の中で、「殺されようとする奴隷たちを守ったのと同じように、今こそ、まだ生まれていない者たちを守る時である！」と声を上げた。

まもなく私は大きな独房で一人きりになり、主にあらん限りの賛美と感謝をささげた。繰り返

返し私は、レスキューでよく歌われる歌を歌った。最初の一節は「われらの神は恐れ多い神なり」である。実際、神は恐れ多いのである。家族から引き離されているということの痛みに対処する唯一の方法は、たえず、主のなしたもうたことのすべてのゆえに主にあって喜ぶということである。

#### 言いなりになるという束縛を打破する

投獄直後、私は味わったあらゆる感情の意味を理解できなかったが、今ならそれがよく理解できる。射殺前、自らの身を守ってきたのと同じように自分の隣人たちを守る自由が自分にはなかったと気づくようになって私は苦しんだのである。国家の言いなりになるという束縛を脱しなければ、怒りが今にもわが身の上に降り注がれそうであった。わが暴虐な政府に楯をつくがゆえに迫害されるのではないかと恐れると、国家の支配に服従することは魅力的であるように思えた。私の気持ちと決意は、責任を持って行動するという高い犠牲を思い、くじけた。責任ある行動をとるためには、主に従うことを重んじる意志の力を要したのである。

中絶を合法化しているどんな国家も、そこに絡んでいる諸問題を正しく理解するすべての市民たちを恐怖と脅しで覆い尽くしているのである。中絶を合法化することにより、政府側は、大量殺人を敢えて妨げようとする者には誰に対しても威嚇武器の照準を合わせてきた。その結果として生じる政府に対する恐れは、個人と集団の両方の考え方に対して、思考停止させるほどの計り知れない影響を及ぼしている。警察側が人々の心に支配を及ぼす力を過小評価する者は皆、政府の最も強力な道具と言ってもよいものを正しく認識できていないのである。まだ生まれない者たちを守ることに関する全体の真理を語り、これを実践する者がなぜこれだけ少ないのかと不思議に思うならば、「虐殺されるために連れていかれる者たちを救うことは違法である」という説明以上のものを求める必要はもはやない。国家の暴虐を脱して以来、私の魂にあふれている内なる喜びと平安により、私が入っている6×9フィートの独房は、勝利して新しく解放された王国となった。目下のところ国家によって強要されている隷従状態にいたると思っただけで私は身震いする。

まだ生まれていない者たちを守る誰かの手によって中絶提供者が殺害されるというニュースに対する適切な反応とはどういうものであるのか。こういう状況下では、焦点は、殺害された殺人者ではなく、殺人者の予定された犠牲者たちの救済にあるべきである。たとえば、『エステル記』では、主が、危害を加えようとしているペルシア人たちからユダヤ人たちを救い出した際、人々は敵たちの死を嘆くことはしなかった。それよりもむしろ、彼らはごちそうを楽しみ、歓喜する祝日を定め、それが今日に至るまで祝われ続けているのである。

### 家族軽視と過剰暴力？

私のように行動することにより、私は家族を十分にかばうことをしてこなかったと言って反対意見を述べる者もいる。しかし、家族に関する務めを行うことを聖書が重要視しているにもかかわらず、キリストの召命に答えなければならないことは——たとえ子供たち、妻、家、自分の命をさえ捨てることを要求されても——、自明のことである。高次の召命を実行するためには、より小さな諸義務を放棄することが往々にして必要である。

ブリトン医師殺害が行き過ぎであると言って反論する者もいる。しかし、こういう見解を持っている多くの人々は、ユダヤ人の大虐殺中に何者かがナチ強制収容所の「医師」を撃って殺したことを知ったならば、反論しないであろう。

守るための暴力の適切な度合いは、状況によって決定される。一連の状況下における行き過ぎた暴力は、もっと過酷な状況下ではまったく不十分かもしれない。極端な状況は通常、極端な手段を求める。家族を殺そうとしている何者かにけがを負わせただけで、何週間も帰還した殺人犯として投獄されなければならないとすれば、後になってその者は家族の誰でもいいから殺す。これでは義務を果たしたと考えるであろうか。殺さずにけがを負わせるだけであれば、結果としてその者が後でたくさんの人間を再び殺害するようになるという状況下では、死に至らしめる目的の暴力は正当化されるのである。『創世記』14章は、アブラハムとその一族が甥ロトを捕まえて捕虜にした一団を殺害した出来事を記録している。神は後で、メルキゼデク（キリストの予型）を通して、この殺害を祝福した。メルキゼデクは、アブラハムの敵対勢力をアブラハムの手引きに引き渡したのである。こういう状況下では、死に至らしめる目的の暴力は不可避であった。それにより、殺された者たちが後で再結成されて、アブラハムまたはロトを再び脅かすことが確実に阻止されたのである。

### 法的救済に限定されるか？

政府が大量殺人に制裁を科す時、その対応策として法的・教育的救済に限定されると多くの人は考えているが、それは間違っている。そういうことよりも、子供の命に対する直接的な脅威への対応は、単に実行可能な教育的・立法的救済策を追求するのではなく、子供を直接的・効果的に守るために必要なことを行うことである。

こういう状況下では法の範囲内にとどまるべきであると思う人々は、答えに窮する困難な問題がいくつかある。他のどんな少数派の殺害にも制裁を加えようとしているのに、毎日通りで何千もの者たちが虐殺されているならば、介入することは間違っているだろうか。個人々が中絶クリニックを爆破することが間違っているならば、アウシュビッツにつながる道を爆撃したことも間違っていたであろうか。こういうことは行き過ぎであるとしても、キリスト教徒たちが——ちょうどキリストが神殿を清めたように——、中絶クリニックの机をひっくり返し、敷

地内から一人残らず追い出すことはありうるだろうか。ありえないとすれば、どうしてそういうことをしないのか。集団レイプや奴隷化が直接必要な手段で食い止められるべきであるならば、大量殺人が同様の手段で食い止められてはいけないのであろうか。

### 立証責任

中絶を支持する者がなぜ私を殺人で告発するかは、すぐわかる。ロトを救出する際にアブラハムが殺した人々の側に立つ人々は、アブラハムに同様の対応を取っていたであろう。ロトを救出する過程でアブラハムは捕まえられ、敵対勢力によって裁判にかけられたとしたら、どうなったであろうか。アブラハムの裁判が公正であるためには、彼に対する偏見に関わりなく、有罪と証明されるまでは彼を無罪と見なすことが要求されたであろう。アブラハムの行動に対する反対意見が提起されることがあったとしても（たとえば、アブラハムは過剰暴力を行使したと申し立てられたかもしれない）、彼が間違っていることは証明できなかったであろう。無実の人々を守るために誰かが自らの命を犠牲にすることはどう見ても高潔なことであるので、それは間違っているとは証明できない。アブラハムはすっかり疑いを晴らして罪なしとされたはずがなく、彼のためにいろいろな疑念が起こったであろう。アブラハムが救出したあのたくさんの人々は、アブラハムの行動の正しさをなるほど思わせる仕方で証明できたであろう。アブラハムが行使した必殺の暴力は、彼にとっては妥当で必要不可欠であるように思えたであろう。彼らはほぼ確実に、アブラハムの決然とした行動のゆえに彼を神と共に祝福したであろう。それとまったく同じように、今日その命が脅かされようとしていたまだ生まれていない多くの子供たちは、必要な直接的な手段をもって介入することの道徳性の紛れもない証人となっているのである。アブラハムの事例と同様、われわれがあらゆる反論を論破し、信仰をもって答えない限り、罪のない者たちは取り返しのつかない損失を被ることになる。

### 命を脅かされている子供を救うことの優先権

どういう優先権が中絶阻止行動に与えられるべきであるか。中絶が深刻な問題であるとわかっていながら、多くの人々は今もなお、家族または教会の関心事よりは低い優先順位が与えられるべき他の多くの「社会の争点」の一つとして、これを分類している。しかし、いかなる生活領域においても生命は通常、他のすべての義務を一時停止することを理解しておくことが重要である。たとえば、通りの片隅で福音を語っている最中に子供がその通りに駆け込んでくるのを見るならば、その子供が安心できるまで他の義務を延期しないならば、重大かつ恥ずべき怠慢の罪責を負い、自分が言い表しているつもりの福音に泥を塗っている。

さらに、自分の子供たちに差し迫った脅威を他のすべての関心事よりも優先するのであれば、自分の隣人の子供への同様の脅威に対しては優先順位が低いというのはどうしたものか。優先

順位におけるこういう格差は、あの第二の戒めと黄金律が克服するように意図したことそのものではないのか。良きサマリア人は優先順位を不適切に用いたのか、それとも、例の困窮する男のそばを通り過ぎた者たちの側に問題があったのか。

アブラハムは、『創世記』14章に描かれているように）甥ロトが囚われたことを知った時、ロトが安全な身になるまで他のすべてのことを中止した。もし自分の群れを飼い、改宗者を作ること——あるいは、ほとんど他のどんな義務も——がロト救済よりも重要であると決めたならば、アブラハムは不作為の罪があったであろう。それとまったく同じように、中絶が焦眉の脅威を起こしている以上、われわれは喜んで、日常の諸義務を中止し、罪なき者たちを救うために必要な犠牲を直接払うのである。もっともすべての者がアブラハムの行ったように、武器を手取るように呼びかけられているわけではないが。神の命令がそれを要求するのである。逮捕後まもなくして、検察側は、死刑を求刑することを表明した。このため、私は、自分を殺そうとする検察側の働きに抵抗を試みるべきかどうかを決心せざるを得なくなった。少し考えてから、あの大多数の人間を殺害から救い、それによって神に栄光をもたらすために自分のできることは何であれ、それを実行するのが私の義務であると私は決心したのである。私の処刑を認めれば殺される子供の数が少なくなるという確証はなかった。しかし、こういう判断のもとに私は訴えを展開した。

### 裁判を一笑に付せ

私の裁判は、法の暴虐の典型例であった。ナチ支配下のドイツでユダヤ人たちを殺されないように守った者たちの裁判——戦争終結前——と類似する点が種々あった。しかしながら、戦後まもなく役割が逆転し、ユダヤ人の保護者たちを弾劾した者たち自身が有罪と定められたことを思い起こすべきである。

こういうことを心にとめて、以前オペレーション・レスキューと関係した中絶反対派弁護士ミカエル・ヒルシュは私の名前で裁判官に弁論趣意書を提出した。（私の救援に来た別の中絶反対派弁護士）ヴィンス・ハイザーの助力により、私の行動が大量殺人を阻止するために必要であったことを証明することが認められねばならないとわれわれは主張した。われわれは、まだ生まれていない者たちを守るために正当化しうる殺人という原則を適用した。われわれはまた、裁判官に対して、もし真実を開陳することを認めないならば、将来いつか、中絶の大虐殺を支持したかどで裁判を受けるかもしれないことを再認識させた。

中絶医が殺人を犯していると市民の四十七％が考えているにもかかわらず、裁判官は、私を敗訴とし、この信念を表明することを私にさせなかった。裁判官は、報道禁止令で私に発言させなかった。真実を話す自由——すべてのアメリカ人が享受しているはず——は、裁判中、私には認められなかった。私の命はどうなるかわからなかったが、裁判所は、中絶反対の私の見

解を厳しく排除したのである。もし真実を語ることが許されたならば、中絶医、及び、彼を保護した政府は、大量殺人への関与で裁判に付されたことであろう。政府側には私の弁論を抑える既得権があった。中絶医のみならず、政府もまた真実に反対する暴力を正当な仕方で行使させたかもしれないことを立証できる能力が私にはあったであろう。大量殺人を承認する政府側に抵抗し、罪のない犠牲者たちは必要な手段で守られなければならない。真実を語る弁論を認められなかった以上、もうやめにしてほしかった。私は何を発言すべきか。真実を語ることができなかった以上、私には言うべきことはほとんどなかったのである。下手で無駄な議論を提起しても何の意味もなかった——そんなことをすれば、私が公平な裁判を受けているように見えてしまうだけであろう。刑を言い渡される段階で、私は初めて裁判官に話しかけ、私の「締めくくりの主張」として短い声明文を読み上げた。

あなたには隣人の命を守り、そうする必要があるならば暴力を行行使する責任があります。あなたはこの真実を隠そうとして、私の血を、まだ生まれていない者たちや、抑圧された人々を守るために闘った者たちの血と混ぜ合わせるのかもしれない。しかし、真実と正義が勝つのである。神があなたを助けて、あなたが守られたいと願うように、まだ生まれていない者たちをあなたに守らせてくださるように。

しばらくしてから、私は、フロリダ州立刑務所の死刑囚棟に付き添われて行った。私は、反射的にフロリダ州最高裁に対する上訴を回避するわけにはいかなかった。死刑判決が支持されると同時に、私は将来のすべての訴えを放棄した。

### 真実を変質させる世界

合法的中絶に対する世間の冷淡な反応を克服するための最も強力な武器は、この残虐行為に抵抗するために必要な手段を（神の命令によって要求されているように）支持することである。世の中も世の中のキリスト教徒も、まだ生まれていない者たちに対する注意義務を怠っていることを照らしつける神のサーチライトを求めている。しかし、これらは、真の悔い改めを生み出すために神が用いる手段なのである。

高邁な倫理がなければ、心からの悔い改めなどありえない。罪を目にしなければ、救済者の必要などない。神の掟の諸要求が中絶という大虐殺に適用されていないならば、まだ生まれていない者たちをないがしろにしていることを人々に確信させ、赦しを得るために人々をキリストに向けさせるのは、いかにして可能か。

神の御腕は短くないのである。ごく一部の者が求められている献身を示せば、神は、合法化された中絶の側の潮流を変え、世界的な広がりのある転換を開始させることができるのである。

ユゴーは、「軍隊の侵入には抵抗できるが、その時が到来している思想には抵抗できない」と書いている。まだ生まれていない者たちを暴力で守ることは、その時が到来している思想よりもはるかにまさるものである。それは、その時が到来している聖書に基づく一つの義務である。

われわれが求め、考えていることのすべてにはるかにまさって、神はこの義務の適用を祝福することができる。もしキリスト教徒たちが悔い改め、犠牲を顧みず、この義務について大胆な立場を取ろうとするならば、主がわれわれのために闘い、われわれを通してご自身の栄光と名誉のために勝利されるであろう。それゆえ、中絶が死に至らしめることを目的とする暴力であると信じるならば、それを阻止するために必要な暴力を支持するのが当然である。